この素晴らしい世界に輪廻眼を！

イタチ丸

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「また新たな物語が書けるのなら、最高傑作を書き上げたい」

七代目火影の兄弟子が平和を願って別れを告げ、第二の人生を仲間と共に歩んでいくお話。

目次

第1章
プロローグ ―――― 1
第1話　うずまきナガトの新ストーリー ―――― 5
第2話　我が名はめぐみん！ ―― 15
第3話　人生辛い事だらけ ―――― 27
第4話　スキルノアリガタミ ―― 32
第5話　紫の眼 ―――― 41
第6話　リッチー ―――― 50
第7話　湖の駄女神 ―――― 61
第8話　へっぽこ勇者と魔剣 ―― 72
第9話　罪ある魔王幹部に、痛みを ―― 82
第2章
第10話　愚かな失態 ―――― 90
第11話　冬の精霊 ―――― 95
第12話　親友との再会 ―――― 107
第13話　魔道具店の訪問 ―――― 117

第1章
プロローグ

「シリーズの出来ってのは三作目・・・ 完結編で決まる！」
「駄作を帳消しにするぐらいの最高傑作になってくれよ・・・ ナルト！」
未来の火影は力強く親指を突き立てた。
（お前ならこの世の平和をもたらす事が出来る。俺はお前を信じている。）
その少年の姿を最後に、俺はそっと目を閉じた。
だんだん意識が薄れていく・・・

ーーーーーー

「あ、あの・・・ そろそろ目を覚まして頂けませんか？次の人も待っていますし・・・ 何よりこの図がシュールなので」

何処かから声が聞こえる。もう天国に辿り着いたのだろうか。
俺はそっと目を開く。辺り一面真っ白な部屋、目の前には高貴な美少女と言わざるを得ないような人物、こいつは女神のような神の種族なのか？とにかく突然の事で流石に驚きを隠せずにいた。
「どうやらお目覚めになられたようですね。では改めまして・・・」
「長門さん、ようこそ死後の世界へ。残念ながら貴方の人生は終わりを告げました。」
やはり此処は天国か。俺は安堵の表情になる。
「それで、俺はこれからどうなる？」
「貴方には３つの選択肢があります。
１つ目はもう一度新しい人生を歩む為に生まれ変わるか、２つ目はこのまま天国へと旅立つか、３つ目は世界の滅亡を図る魔王軍を倒す為に異世界に転生するか」
「・・・　中者で頼む」
転生と迷ったがその場の者達がやってくれるだろう。そう思って俺は天国へ旅立つ事を選んだ
「分かりました。では天国・・・　って、えええ!?」
思いきり驚かれた。俺は何か変な事でも言っていたか？
「いいんですか!?天国って何もないんですよ!?食べ物も飲み物もテレビも本ももちろ

ん、そもそも体がなくなっているんですから遊ぶ事も恋愛も出来ずにただ何もない人と会話する事しか出来ないんですよ!?」

「取り敢えず落ち着け・・・ 別に俺はそれでも構わん」

そこまで俺を天国に行かせたくないのか、この小娘は

「お願いします! 異世界転生を選んでください! 現在その世界は滅亡する寸前なのです! 魔王軍を倒す為には輪廻眼を持つ貴方の力が必要なのです! だから・・・」

「はぁ・・・ 分かった。ならば転生を選ばせてもらおう」

初めは平和の為に動こうと思っていた所だ、そいつらの手助けもしてみよう

「・・・ ありがとうございます!」

先程まで涙ぐんでいた表情が一瞬にして明るくなった。何かそうしなければならない理由でもあるのだろうか

「それでは、まずは特典を一つ選んで頂きます。」

カタログのような物を手渡される。しかし

「悪いが必要ない。自分の能力で何とかする」

「そうですか・・・ 分かりました。では、魔法陣の上へ」

俺はそっと魔法陣の上に立つ

「異世界に行く前に、いずれまた世話を焼くこともあるだろう。だから、名を聞いてもい

いか？」
「はい、私の名前はエリスです。それでは・・・　さあ勇者よ！願わくば、数多の勇者候補達の中から、貴方が魔王を打ち倒す事を祈っております。さあ、旅立ちなさい！」
　魔法陣に光が差し込む
「また、お会いしましょう」
　エリスは笑顔で俺を見送った

第1話　うずまきナガトの新ストーリー

「随分と近未来的だな…」

異世界に辿り着いて数分、俺は特に当てもなく今後どうすれば良いか情報収集の為に街を歩き回っている。

街や里というよりは城下町のようだな…

度々周りから［冒険者ギルド］という言葉を耳にする。どうやら俺は其処に向かうべきだろう。

「冒険者ギルドというのは何処にある?」

近くにいた住人に話を聞く事にした。

「ギルド?あら、ギルドを知らないなんて、他所から来た人かしら?」

「ほう…　この街では当たり前なのか。つい先程訪れた者でな」

「あらあら…　という事は、冒険者を目指している方かしら。駆け出し冒険者の街、アクセルへようこそ。この道を真っ直ぐ行って右に曲がれば、看板が見えてくるわ」

「そうか…　感謝する」

場所を教えてくれた住人に礼を言い、真っ先にギルドへ向かう。

ーーーー冒険者ギルドーーーーー

数多の冒険者が共に酒を交わし、飯を食い、芸をしたりととても賑わっている。俺はその光景を見て何処か懐かしみを感じている。

冒険者になるには受付に行って登録してもらう、　そうと知った俺は登録をしに受付に向かう。

「今日はどうされましたか？」

「ここに来れば冒険者の登録が出来ると聞いたんだが」

「はい。えっと、その前に登録手数料が掛かるのですが・・・」

登録・・・　手数料？

成る程、金が掛かるのか。困ったな・・・　一度出直すとしよう。そう思い引き返そうとした途端・・・

「・・・ これは?」

後ろに並んでいたフードを被った人物が突然札束を投げるように俺に手渡した。

性別は顔が隠れている為よく分からなかったが・・・ それより札束の数が中々に多い。これを使えという事なのだろうか?

「・・・ 遠慮なく使わせて貰う。おい、金は幾ら掛かる?」

「・・・ はっ、あ、登録料はお一人千エリスになります」

どうやら此奴も驚きを隠せなかったようだ。それもそうか、見ず知らずの人間に唐突に金を渡す者など基本的にはいないからな。

ちなみに三千エリス程度貰った。

「では、冒険者について簡単な説明をさせて頂きます。

まず、冒険者とは街の外に生息するモンスターや人に害を与える物の討伐を請け負う人の事です。とはいえ、基本は何でも屋みたいなものです。冒険者とはそれらの仕事を生業にしている人達の総称。そして、冒険者には各職業がございます」

あまり忍の任務と変わらないな。

受付の小娘は身分証のような名刺を差し出した。

「そして、この世のあらゆる物は魂を体の内に秘めています。生命活動を行う存在にとどめを刺す事で、その存在の魂の記憶の一部を吸収出来ます。通称、経験値と呼ばれる

ものですね。それらは普通、目で見える事は出来ません。しかし・・・」
　カードの一部を指差す。ここに経験値やレベルが記録されていくということなのだろう。
「もうお気付きかもしれませんが、このカードを持っていれば冒険者が得た経験値が。それに応じてレベルも同時に表示されます。これが冒険者の強さの目安になり、どれだけの討伐を行ったかもここに記録されます。要約すると、レベルが上がると新スキルを覚えるためのポイントなど、様々な特典が与えられるので、頑張って経験値を貯めてレベルアップをして下さいね」
　要するに初歩的なモンスターから次々に狩っていけという事か、まあ肩慣らしにはそうする事も必要か

「はあああああっ!?何ですこの数値!?知力と幸運以外のステータスが大幅に平均値を超えてますよ!?貴女何者なんですか・・・ !?」
　隣の叫び声と共に周りが騒めきだす。カードに触れようとした途端であったので体をビクッと反応させてしまった。
　再びカードに触れる。カードの中に自身のステータスが映し出される

「ええと、ナガトさんは・・・　はいいいいっ!?」
「・・・　いちいち騒ぐな、毎度毎度心臓に悪い」
　この世界の奴らは何か起こると直ぐ叫びだす風習なのか・・・　？
「いやいやいやだって!もう全てにおいて尋常じゃない位のステータスですよ!?これなら選択できない職業なんてありませんよ!!」
　ギルド内が俺に注目している。先程の青髪の奴よりも騒めいているんだが。ちなみにそいつは思いっきり俺を狼のように睨みつけている。
　とにかく目立つ事は好きではないのでさっさと職業を決めてこの場を離れる事にしよう
「・・・　職業は忍で頼む」
　職業のカタログを読み漁ると、ふと俺のなりたかった職業が目に入る。もちろん迷う事は無かった。
「忍、ですか?でも忍は中級職ですし、上級職のソードマスターとかアークプリーストとかナガトさんに合うと思うのですが・・・」
「構わん。俺は忍以外に魅力を感じない、というより興味がない」
「そうですか、分かりました。スタッフ一同、心から歓迎しております!」

今後の生活の為に食料調達やら色々調整する為に俺はギルドを出ることにした。
「お前、凄い強いんだってな！」
「お前がパーティに入ってくれれば百人力だぜ！」
「目の前で見るとちょっとカッコいいかも・・・　！」
「というか何なんだその眼？」
冒険者達が次々に俺をパーティに誘ってくるが、そんなものは気にせずギルドを後にする。

こうして、うずまきナガトの新ストーリーはここから始まる・・・

「なぁんであんな奴なんかが私よりも能力高いのよ!?今度会ったら痛い目見せてやるんだから！」
「こういうのって俺が起こすイベントだよなあ・・　？」

ーーーーーー

雲一つない、晴れやかな空
その下の広大な平原地帯には巨大なカエルのようなモンスター、ジャイアントトードが何匹も群がっている。
「さて、お手並み拝見といこうか」
穢土転生で蘇生された時は、ほとんどカブトに操られてばかりでいたため自ら身体を動かすのは本当に久々である。比較的難易度の低いクエストで肩慣らしをする事にした。
「神羅天征！」
ドオオオン!!!
ジャイアントトードの群れが一斉に弾き飛ばされる。直ぐに起き上がろうとするが動きが鈍すぎる。
「肩慣らしにしてはランクが低すぎたようだな・・・　終いだ」

ドゴォォォン!!!

起爆札付きのクナイを投げつけ、大きな規模の爆発を起こした。

丸焦げになり、煙を立てている。

「・・・　そろそろ帰るか」

目当ての物を片付け、ギルドに戻ろうとしたその時・・・

「ぎゃあああああああああ!!!」

近くで悲鳴が平原に響く。

その方向に振り向けば、先程ギルドにいた少年が短剣を振り回しながらジャイアントトードに接近している。

「アクアー!・お、お前、食われてんじゃねええええ!!」

剣の使い方がなっていなさすぎる。流石に見ていられないので手助けする事に。

「おい、下がっていろ・・・　!」

ジャイアントトードの上に乗り、カエルの急所である後頭部にクナイを刺しこむ。

瞬く間に意識を失った。

「うわあああああんっ…！ありがど…　ほんどに…　ありがどうね…　ぐずっ」
「ほら言わんこっちゃねえ、この駄女神が…　あの、助けてくれてありがとうございます。俺の名前はカズマです」
「長門だ。あと、そんなに畏まらずに気軽に接してくれ」
「分かった。じゃあ、長門って呼んでもいいか？」
　コクリと頷く。
　先程から泣きじゃくっていたアクアが起き上がり、俺に宣戦布告でもしてくるように指差してきた。
「私はアクア。アクシズ教団の崇めるご神体、女神アクアよ！貴方、私のパーティに入りなさい！そうすれば貴方は私によって幸せになれるし、何より…　私達が助かります」
「俺からもパーティ参加頼んます！あ、ちなみにこいつは色んな人にも女神気取ってるから信じなくていいぞ」
「うっさいわね！とにかく、貴方は私のパーティに入るの！良い!?」
「…　まあ、パーティというのも悪いものではないからな。構わないが、俺の稽古には付き合ってもらうぞ？」
　こういう奴らはしっかり鍛えあげた方が良い。現に自来也先生がそうしてくれたからな。

「えー、何で女神であるこの私がそんな事しなきゃいけぐえっ！」
「魔王を倒す為に精進して参りまーーーす!!」
カズマがアクアの頭を無理矢理下げさせている。
・・・　本当にこんな奴が女神なのだろうか？
本当に面倒事が多くないと良いんだが・・・

第2話　我が名はめぐみん！

「仲間を募集しましょう！」
　食事中にアクアが唐突に言いだす。
「長門がいるから別に良くね？」
「いや、俺はアクアの意見に賛成だ。今の難易度であれば楽に熟せるが、魔王討伐の目標に進むに連れて俺だけの戦力じゃ厳しくなるだろう。」
「成る程･･･ それもそうだな。けど、俺達のパーティに入ってくれる奴なんているのか？」
「この私がいるんだから、募集かければすぐよ。何せ、私は最上級職のアークプリーストよであり、女神アクア様なのだから、ちょろっと募集かければ『お願いします私を連れてって下さい何でも言う事は聞きますから』って輩が山ほどいるわ！分かったら、唐揚げ一つずつ寄越しなさい！」
「はぁ･･･････」

ーーーーーーー

翌日

「「「……」」」

誰一人来ない…

その理由は分かっている

「…　なあ、ハードル下げようぜ。目的は魔王討伐だから仕方ないっちゃ仕方ないんだが…。流石に、上級職のみってのは厳しいだろ」

「うう…　だってだって…」

「確かに、例え来たとしてもバランスの問題があるからな。ちょっとハードル下げに…」

募集のハードルを下げようとした途端、誰かがこちらに近づいて来る。

「上級職の冒険者募集を見て来たのですが、ここで良いのでしょうか？」

「我が名はめぐみん！アークウィザードを生業とし、最強の攻撃魔法、爆裂魔法を操る者！」

黒マントに黒いローブ、黒いブーツに杖を持ち、トンガリ帽子まで被った、物語にもよく出て来そうな魔法少女めぐみんはポーズを決めながら自己紹介をする。

「…　冷やかしに来たのか？」

「ち、ちがわい！」

「…　唐揚げ食べるか？」

「…　！はい！もう3日も何も食べていなかったので、助かります！」

唐揚げは子供の好物という意味で揶揄い交じりに言ったのだが…

「（使ってないフォーク目の前にあるのに何で長門の使ってんだよ…）」

ーーーーーー

「爆裂魔法は最強魔法。その分、魔法を使うのに準備が結構かかります。準備が整うまで、あのカエルの足止めをお願いします」

俺達は満腹になっためぐみんを連れ、カエル討伐に来ていた。
「俺はお前たちの戦いを見学させてもらう」
「は？何で？」
「ここで俺が出ればリベンジの意味がないだろ？だが、ピンチの時は手を貸してやる」
「あ、そっか。よし、行くぞアクア。今度こそリベンジだ。お前、一応元なんたらなんだろ？たまには元なんたらの実力を見せてみろ！」
「元って何!?ちゃんと現在進行形で女神よ私は！アークプリーストは仮の姿よぉ！」
「…　女神？」
涙目でカズマの首を絞めようとしてくるアクアを、めぐみんが不思議そうに首を傾げる。
「を、自称してる可哀想な奴だよ。まあ、出来るだけそっとしておいてやってくれ」
カズマとめぐみんは哀れな人間を見る目でアクアを見る。そして、とうとう耐えきれずに
「ナァァァガァァァトォォォ!!」
アクアは俺に思いっきり抱きつき、胸の中で大泣きする。
こいつがエリスと同じ女神とはとても信じ難い。

「こうなったら、今度こそ女神の力を見せてやるわよ！見てなさいよカズマ！」
直ぐに立ち直ったアクアは拳を握ってヤケクソ気味に、近い方のカエルへと駆け出した。
ジャイアントトードに打撃は効かないと受付の人から聞いてる筈なんだがな・・・
見事にカエルの体内へ侵入する事に成功した学習能力のないアクアが、身を挺して時間稼ぎをしようとしている。
自らを犠牲にしてまで敵の足止めをする女神、何故か逆にカッコよく感じる・・・
・・・　周囲の空気がビリビリと震え出した
「もう魔法を放てるようになったようだな」
「はい、見ていて下さい。これが、人類が行える中で最も威力のある攻撃手段。これこそが、究極の攻撃魔法です・・・！」
めぐみんの杖の先に光が灯る。
膨大な光をギュッと凝縮した様な、とても眩しいが小さな光。
めぐみんが、紅い瞳を鮮やかに輝かせ、カッと見開く。
「『エクスプロージョン』ッ！」

平原に一筋の閃光が走り抜ける。
遠く、こちらに接近してくるカエルに吸い込まれるように突き刺さる。
そして…

ドゴォォォン!!!

目も眩む強烈な光、そして辺りの空気を震わせる轟音と共に、カエルは木っ端微塵となった。
威力は起爆札数枚分か、デイダラの起爆粘土並の破壊力だろう。
「これが上級職の魔法というやつか…」
ついつい感服してしまう。

爆煙が晴れると、カエルのいた場所には二十メートル以上のクレーターが出来ており、その爆発の凄まじさを物語っていた。

しかし、魔法の音と衝撃で目覚めたのか、一匹のカエルが地中からのっそり這い出てきた。
普通、カエルは水源がないと生きられないはず。
ジャイアントトードはそういうモンスターなのだろうか…
「めぐみん！一旦離れて、距離を取ってから攻撃…」
カズマはめぐみんに距離を取って爆裂魔法を放つという作戦を伝えようとするが、言いかけた所で動きを止めた。
見ると、そこにはめぐみんが倒れていた。
「ふ…。我が奥義である爆裂魔法は、その絶大な威力ゆえ、消費魔力もまた絶大。要約すると、限界を超える魔力を使ったので身動き一つ取れません。あっ、近くからカエルが湧き出すとか予想外です。やばいです食われますすいません、ちょ、助け……」
「「……」」

ーーーーーー

結局、俺も加わり見事にカズマ達が受けた三日以内にジャイアントトード五匹の討伐のクエストを完了させた。

「うっ…　うぐっ…。ぐすっ…。生臭いよう…。生臭いよう…。」

俺はめそめそと泣いている粘液まみれのアクアを負ぶってカズマの後を付ける。

「カエルの体内って、臭いけどいい感じに温かいんですね…。知りたくもない知識が増えました…」

自来也先生にしか分からなさそうな知識を教わってもな…

カズマはアクアと同じく粘液まみれで、知りたくもない知識を教えてくれているめぐみんを負ぶっていた。

「めぐみん。今後は爆裂魔法は禁術…　禁断魔法として扱え。アークウィザードなのだから、他の魔法もあるだろう？」

カズマの背中に負ぶさっためぐみんが、肩を掴む手に力を込めた。

「痛ッ…　！」

「…　使えません」

「「…　は？」」

同時に変な声が漏れた。

「…　私は、爆裂魔法しか使えないんです。他には、一切魔法が使えません」

「…　マジか」
「…　マジです」
カズマが絶句する。
…　いや、それは有り得ない。
「爆裂魔法以外使えないってどういう事？爆裂魔法を習得出来る程のスキルポイントがあるなら、他の魔法を習得していない訳がないでしょ？」
俺より先にアクアが発言する。
「そういや、ギルドのお姉さんがスキル習得がどうのって…」
「…　いえ、スキルどうこうの問題ではなく私は爆裂魔法をこよなく愛すアークウィザード。爆発系の魔法が好きなんじゃなく、爆裂魔法だけが好きなのです」
「爆発と爆裂って何が違うんだ？」
同じ事を疑問に思っていた。何か細かい違いがあるのだろう。
「もちろん他のスキルを取れば楽に冒険が出来るでしょう。火、水、土、風。この基本属性のスキルを取っておくだけでも違うでしょう。…　でも、ダメなのです。私は、爆裂魔法しか愛せない。例え今の私の魔力では1日1発が限界でも。例え魔法を使った後は倒れるとしても。それでも私は、爆裂魔法しか愛せない！だって、私は爆裂魔法を使うためだけに、アークウィザードの道を選んだのですから！」

「素晴らしい！素晴らしいわ！その非効率ながらもロマンを追い求めるその姿に、私は感動したわ！」

…　発する言葉も思い浮かばない。

はっきり言わせてもらうと、カズマもアクアも世話のかかる奴だ。

更に一人増えると疲れるというか何というか…

「そっか。まあ、頑張れよ。そろそろ街が見えてきたな。じゃあ、ギルドに着いたら報酬を山分けにしよう。うん、まあ、機会があればまた会うだろ」

カズマがめぐみんをパーティに入れない事を何とか別の言葉で誤魔化そうとしている。

だが…

「俺はめぐみんをパーティに入れても良いと思うぞ」

「…　へ？」

「本当ですか!?」

紅い瞳をキラキラ輝かせながら俺の方を向く

「確かに、一度の戦いに一度しか魔法が使えない魔法使いは悪く言ってしまえば無能だ。だが、あの爆裂魔法を『一撃必殺』や『とっておき』と捉えればとても頼りになる」

「…　そ、そうですそうなのです！あの魔法はマ〇〇テのようなものなのです！」

いや、それは良く分からないが
「カズマもそれで良いだろう？」
そう言ってカズマの方を振り向く。
が、どうしてもカズマは納得がいかないらしい
「いやいやいやいや。長門、良く考えてみろ。確かに一撃必殺とか考えれば強くて頼もしいかもしれないよ？でもその爆裂魔法しか使えないんだよ？そんな魔法使いとか使い勝手悪すぎだから。だからめぐみん、お前とはここでお別れだ」
カズマは負ぶっているめぐみんを一度引き剥がす。
が、めぐみんは即座にカズマの腕に必死にしがみつく。
「お、おい放せ、お前多分他のパーティにも見捨てられた口だろ、というかダンジョンに潜った際には、爆裂魔法なんて狭い中じゃ使えないし、それこそ役立たずだろ。お、おい放せって。ちゃんと今回の報酬はやるから！ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＥ！」
「見捨てないでください！もうどこのパーティにも拾ってくれないのです！ダンジョン探索の際には、荷物持ちでも何でもします！お願いです、私を捨てないでください！ナガトは、私を見捨てませんよね!?」
今度は俺の腕にがっしりしがみつく。
アクアを負ぶっている為か妙に腕に負担が掛かる。

「おい、あんまり大声で叫ぶな。色々と目立つ…」
　通行人達からひそひそと小声で話している。
「あの赤髪の人、女の子を庇おうとしてる…！格好いい…！」
「それに引き換え、あのジャージの男はあの小さい子を見捨てようとしてたわよ？」
「もう一人女の子いるし、二人とも粘液まみれよ？一体どんなプレイしたのよあの変態」
　お互いに色々と誤解されている事に俺は苦笑するしかなかった。
　アクアはそれを聞いて俺の後頭部に隠れてニヤニヤしながらカズマを見つめている。
　当のめぐみんはというと…
「安心してくださいカズマ！どんなプレイでも大丈夫ですから！先程の、カエルを使ったヌルヌルプレイだって耐えてみせ…」
「よぉしよし！分かった分かった！めぐみん、これから宜しくな！」
　いい加減来てくれ、まともな冒険者よ…

第三話　人生辛い事だらけ

「しかし、本当にモンスターを倒すだけで強くなるもんなんだなぁ…」

カエル討伐後、大衆浴場で身体を癒し、現在はカズマと他のクエストを拝見しに行っている。

正直、強くなったという実感はない。が、新しいスキルが使えるようになったらしい。明日にでも実践してみよう。

そんな事を考えながら、クエストボードに到着し新たなクエストを確認する。そこには…

『ーーー森に悪影響を与えるエギルの木の伐採、報酬はでき高制ーーー』

『ーーー迷子になったペットのホワイトウルフを探して欲しいーーー』

『ーーー息子に剣術を教えて欲しいーーー※要、ルーンナイトかソードマスターの方に限る。』

『ーーー魔法実験の練習台探してますーーー※要、強靭な体力か強い魔法抵抗力…』

ロクなものが無かった。
どうやらこの世界で生きていくのは甘くないらしい。
隣のカズマを見ると絶望的な目をしていた。
「なあ長門、俺もう生きてた世界に帰りたくなって来たよ…」
「… まあ、仕方がない。」
何と励ませばいいのか分からなくなってきた…

「… すまない、ちょっといいだろうか… ?」
突然、背後からボソリと声をかけられた。
振り返ってみると、クールな印象を受ける女騎士が、無表情に俺たちを見ていた。
何故かカズマは顔を赤くしながら女騎士を見つめている。
「… カズマ?」
「… え、あ、えーっと、何でしょうか?」
「うむ…。この募集は、貴方達のパーティの募集だろう?もう募集はしていないのだろうか」
パーティ募集の紙を見せてくる。

そう言えば、まだ剥がしていなかったな。
「あー、まだパーティメンバーは募集してますよ。と言っても、オススメしませんけど…」
「是非、私をこのパーティに入れて欲しい！」
「「… えっ？」」
突然、俺達の手を女騎士がガシッと掴んだ。
「いやいやいや！ちょ、待って待って。このパーティ色々と問題あるんですよ、俺の隣の奴はともかく、他二人はポンコツだし、俺なんて最弱職、さっきだって仲間二人粘液まみれになってるし、いだだだっ！」
俺達の握る手に女騎士が力を込めた。
女の割には握力があって若干の痛みを感じる。
「やはり、先程の粘液まみれの二人は貴方達の仲間だったのか！一体何があったらあんな目に… ！わ、私も… ！私もあんな風に… ！あ、いや違う。あんな年端もいかない二人の少女、それがあんな目に遭うだなんて騎士として見過ごせない。どうだろう、この私はクルセイダーというナイトの上級職だ。募集要項にも当てはまると思うのだが… ！」
「… おい長門、どうするんだ？めぐみんの時みたいにまた俺の危機感知センサーが反

応してるんだけど」
「…　まあ、外観や性格だけでは性能がどうとかは判断出来ないからな。加えるのも悪くないんじゃないか…？」
「いやまあそうだけどさ…。お前って優しいなホント…」
　カズマは加えない事を諦めたのか、再度女騎士に話しかける。
「あのー、先程言いかけましたがオススメはしないですよ。仲間の一人は何の役に立つのか良く分からない、もう一人は一日に一発しか魔法が撃てない、俺は最弱職…　ポンコツパーティなんで、他の所をオススメしま…　っ!?」
　更に力が込められる。
「なら尚更都合が良い！いや実は、少し言いづらかったのだが、私は力と耐久力には自信はあるのだが不器用で…。その…、攻撃が全く当たらないのだ…」
「…　な？俺のセンサー正しかっただろ？って、目死んでるぞ？」
「元からだ…」
　…　いや、自分で評価を下げての発言だと信じよう。
「という訳で、上級職だが気を遣わなくていい。ガンガン前に出るので、盾代わりにこき使って欲しい」
　女騎士が、俺達に顔を近づけてくる。

サラサラの金髪が顔に掛かってくすぐったい。
「いや、女性が盾代わりだなんて、ウチのパーティは貧弱なんで本当に貴女に攻撃が回ってきますって。それこそ毎回モンスターに袋叩きにされるかも知れませんよ!?」
「望む所だ」
「いや、アレですよ。今日なんて仲間二人がカエルに捕食されて粘液まみれにされたんですよ!?それが毎日続くかも」
「望む所だっ!」
会話を聞いている内に頭が痛くなってきた。
頬を紅潮させて俺の手を強く握る女騎士。
ここで俺達は悟った。
人生は何処で送ろうと甘くはないと・・・

第４話　スキルノアリガタミ

「なあ。聞きたいんだがスキルの習得ってどうやるんだ？」
カエル討伐の翌日の事。
俺達はギルドの酒場で遅めの昼食をとっていた時、カズマが問いかける。
レベルが上がったという実感が無かったからすっかり忘れていた。
飯を口に頬張っているめぐみんが顔を上げる。
「ひゅきるのひゅうとく…」
「…　飲み込んでから喋れ」
「ごくん、すみません。スキルの習得ならカードに出ている、現在習得可能なスキルってとこから…　ああ、カズマの職業は冒険者でしたね。初期職業と言われている冒険者は、誰かにスキルを教えてもらうのです。すると、カードに習得可能スキルという項目が現れるので、ポイントを使ってそれを選べば習得完了なのです」
「つまり、カズマはめぐみんに教えてもらえば、カズマも爆裂魔法が使えるようになると…　？」

「その通りです！」
「うおっ！」
ぐいっと俺達に顔を近づけるめぐみん。
「その通りなのです！まあ、習得に必要なポイントはバカみたいに食いますが、冒険者は、アークウィザード以外で唯一爆裂魔法が使える職業です。爆裂魔法を覚えたいならいくらでも教えてあげましょう。というか、それ以外に覚える価値のあるスキルなんてありますかいいえ、ありませんとも！さあ、私と一緒に爆裂道を歩もうじゃないですか！」
俺の顔に思いっきり唾が掛かる。
いちいち反応しても仕方ないと思い、おしぼりで顔を拭く。
「ちょ、落ち着けロリっ子！」
「ロ、ロリっ子!?」
先程の熱が一気に冷めていく。
「つーか、スキルポイントってのは今3ポイントしかないんだが、これで習得出来るもんなのか？」
カズマは滾るめぐみんでは話にならないと思ったのか、アクアに尋ねる。
「冒険者が爆裂魔法を習得しようと思うなら、スキルポイント１０や２０じゃきかない

わよ。十年くらいかけてレベル上げを続けて一切ポイントを使わずに貯めれば、もしかしたら習得できるかもね」
「待てるかそんなもん」
「ふ……　この我がロリっ子……」
しばらくは立ち直れなさそうだ。
何故かは正直俺には分からないが、慰めがてら飯でも分けてやるか。
「なあアクア。お前なら便利なスキルをたくさん持ってるんじゃないか？何か、お手軽なスキルを教えてくれよ。習得にあまりポイントを使わないで、それでいてお得な感じの」
カズマの言葉に、アクアは水の入ったコップを握り、しばらく考え込む。
「…　しょうがないわねー。言っとくけど、私のスキルは半端ないわよ？本来なら、誰にでもホイホイと教えるようなスキルじゃないんだからね？」
アクアも一応上級職のアークプリーストだ。面白味のあるスキルを持っているのは確かだろう。
「じゃあ、まずはこのコップを見ててね。この水の入ったコップを自分の頭の上に落ちないように載せる。ほら、やってみて？」
ちょっと人目が気になるが、俺とカズマはアクアに続いて同じように自分の頭にコッ

プを載せた。すると、アクアはどこから取り出したのか、一粒の何かの種をテーブルに置く。
「さあ、この種を指で弾いてコップに一発で入れるのよ。すると、あら不思議！このコップの水を吸い上げた種はによきによきと・・・」
「誰が宴会芸スキル教えろっつったこの駄女神！」
「ええ!?」
なぜかショックを受けたらしいアクアは、しょぼんとしながらテーブルの上で種を指で弾いて転がし始める。
「まあ確かに想定外だが、暇つぶしには丁度いい。そのスキル、少し教えてくれるか？」
「ホント!? 流石ナガト！何処かのヒキニートとは大違いね！」
「ええ・・・ そんな面白いかこれ？」

「・・・ ここでいいか」
俺は先に昼食を終え、スキル拝見の為に席を外し、再びカエルの討伐クエストを受けている。
倒し過ぎて中毒になりかけているが、マシなクエストがこれしかないからな・・・

「覚えたスキルは二つ、か…　まずは一つ目、見せてもらおう」
俺は自然な感じで印を結ぶ。
この印、今まで結んだ事ない…
『火遁・豪火球の術！』
「っ!?」
火球により、一瞬にしてカエルは丸焦げになる。
「…　確かイタチの術だったな。」
それにしてもここまで威力が高かったとは
二つ目…　これは水遁の印？
『水遁・水鮫弾の術！』
地面から大きな鮫がカエルを噛みちぎる。
水のない所でこれ程の水遁を…　！

「鬼鮫の術・・・ 俺の場合、暁メンバーの術を習得する事が出来るのか」
いずれ起爆粘土や傀儡なども使えるようになるという事なのか？
まあ、遠慮なく使わせてもらうとしよう。
カエルも居なくなったので、直ぐに帰る事にした。

「・・・・・」
誰かに見られているような気がしているが、構わずギルドに戻る・・・

「ヒャッハー！当たりも当たり、大当たりだあああああああああ！」
「いやあああああああああ！ぱ、ぱんつ返してええええええええええええええっ！」
広場が騒がしい。
今回は裏からギルドに戻ろうとしていたが、近くで銀髪の少女がスカートの裾を押さえながら悲鳴を上げ、ジャージの男が白い布切れを天にかざして・・・
あれ、カズマか？
「どうした、カズマに何かされたのか？」

「あの・・・！私、あいつにぱんつ奪われたんです・・・！」
「・・・は？」
下らない以前に状況が上手く掴めない
「こいつはカズマに窃盗スキル『スティール』を教えていてな。カズマが試しに使ってみた所、運悪く下着を剥ぎ取られてな。それで今に至る」
詳しく説明してくれて助かるが、こいつ先日の騎士ではないか・・・
一応断ったのだがまた参加希望しに来たか・・・まあ今はどうでもいい。
「おいカズマ、その辺にしてちゃんと返してやれ。困っているだろう？」
「あ!?やだね！これは俺の幸運によって手に入れた激レアアイテムだぞ!!」
呆れた。薄々感づいてはいたが、ここまでの馬鹿だったとは・・・
「そんなの持っても何も役に立たんぞ・・・？」
「立つから！めっちゃ役に立つからぁ!!あ、分かった。そうかっこいい事言っておきながら自分も欲しいんだろこのムッツリスケベが！ぜぇっっっったいにやらんからなぁぁぁ!!!」
そう言ってそそくさと逃げ出すカズマ。
あまりにも下らなさすぎるので放っておきたいのだが、少女が涙目かつ上目遣いでこちらに助けを求めている。

こんな事でチャクラを使いたくないんだが・・

『万象天引』

自ら操る事の出来る引力で、カズマを俺の元まで連れ戻す。
「ぎゃあああああああ!!どうなってんだぁぁぁぁぁぁ!!」
カズマを連れ戻し、がっしりと襟元を掴む。
「・・俺は信じていたんだがな。お前は真面目で戦う度に成長し、強くなる人間だと・・」
「・・ひっ！（怖い怖い！長門のその眼、前から思ってたんだけど近くで見ると凄え怖い・・！」
「・・来世では強く生きろ。『神羅・・」
俺は微笑んでカズマに別れを告げる。
「ぎゃあああああああ!!返します返しますからぁぁぁ！ごめんなさいぃぃぃぃぃぃぃ!!」
「・・そうか」

もう懲りただろう…　カズマの襟元を離す。
勿論脅しの予定だったのだが、ここまで怯えるとはな…

「ハァ、ハァ…　あの紫の眼、疑問には思っていたのだが、やはり人を罵る為の眼であったのだな…　！人を粘液まみれにするカズマに、特殊な眼で罵る長門殿！ますますこのパーティが気に入ってしまった…　！ハァ、ハァ…」

第5話　紫の眼

「ハァ…　これがヒキニートの本能って奴なのね…」
「カズマはレベルが上がってステータスも上がったから、冒険者から変態にジョブチェンジしたんですね…」
案の定、アクアとめぐみんはゴミを見下すような視線でカズマを見ている。
ちなみに、現在俺も冷ややかな目でカズマを見ている事だろう。
「公の場でいきなりぱんつ脱がされたからって、いつまでもめそめそしててもしょうがないよね！よし、ダクネス。あたし、悪いけど金稼ぎのいいダンジョン探索に参加してくるよ！下着を人質に盗られてあり金失っちゃったしね！」
「おい、待てよ。なんかすでに、アクアとめぐみん以外の女冒険者達の目まで冷たいものになってるからほんとに待って」
今の会話が聞こえたらしい周囲の女冒険者達。
それもそうなるだろう…
再びカズマの所為で注目を集められ、それが俺にまで被害を受けていそうな感じで少

し複雑な気持ちだ。
　女冒険者達の視線に怯えるカズマに、クリスがクスクス笑い
「このくらいの逆襲はさせてね？それじゃあ、ちょっと稼いでくるから適当に遊んでてねダクネス！じゃあね！あ、そうだ。愛しのあの子と行こうっと！」
　そう言ってクリスは冒険者仲間募集の掲示板に行ってしまった。
「…　お前は行かなくていいのか？」
「…　うむ。私は前衛職だからな。前衛職なんて、何処にでも有り余っている。」
「そうか…」
　おい。そうやって仲間になりたそうにこっちを見るな。
「あの、ナガト。この方クルセイダーではないですか。パーティに入れない理由なんてないのでは？」
「まあ、そうなんだがな…　カズマも何か言ってやれ」
「何も言えなくなったからって俺に振るなよ。ゴホン…」
「まあ、丁度いい機会だ、聞いてくれ。俺とアクアと長門は、どうあっても魔王を倒したい。けど、俺達の冒険は過酷な物になる事だろう。特にダクネス、女騎士のお前なんて、魔王に捕まったりしたら、それはもうとんでもない目に遭わされる役どころだ」
「ああ、全くその通りだ！昔から、魔王にエロい目に遭わされるのは女騎士の仕事と相場

は決まってるからな！それだけでも行く価値がある！」
「えっ!?」
「えっ？」
噛み合わないな・・・
益々パーティが酷くなってきたと呆れるどころではなくなってしまった途端、大音量でアナウンスが響く。

『緊急クエスト！緊急クエスト！街の中にいる冒険者各員は、至急冒険者ギルドに集まって下さい！繰り返します。街の中にいる冒険者各員は、至急冒険者ギルドに集まって下さい！』

そろそろ魔王軍の奴らが攻めてきたか・・・？
しかし、ダクネスとめぐみんは嬉しそうな表情を見せている。
「何故そこまで嬉しそうにしているんだ？」
「ん、多分キャベツの収穫だろう。もうそろそろキャベツの収穫の時期だしな」
・・・???

ーーーーーー

「「うおおお！大量だあああああああ!!!」」

冒険者達が必死に飛んでくるキャベツを追いかけている。

くだらなさすぎる。一度ここは後にしようか・・・。

「私はクルセイダーだが攻撃が全く当たらないのだ」と自分の評価を低くしていたダクネスの剣術でも拝見しようかと思ったが、キャベツ相手に一発も当たっていなかったので本当にこっそり後にする事にした。

ーーーーーー

ギルドの宿への帰り道

「前にもあったか・・・ ?」
魔道具屋、とでも言うべきだろうか。
若干怪しげな店だが気になるので立ち寄ってみる事にした。

カランカラン
扉についている小さな鐘が涼しげな音を立てながら、客の入店を店主に告げる。
「いらっしゃいませ・・・ ！つまらない物ばかりですが、どうぞご覧になって行って下さい・・・ ！」
一人の少女が笑顔で挨拶する。多分こいつが店主だろう。
お構い無しに手近な物を手に取ってみるが・・・
「・・・・・・・」
店主が不思議そうに俺の目を見つめている。
まあ、輪廻眼が気になるのも仕方がない。
「・・ なあ、これは何だ?」
「・・ あっ、それは強い衝撃を与えると爆発しますから気をつけて下さいね」
何故そんな危険な物を注意書き無しに置くのだろうか。
次に、その隣の物を手に取る。

「それは蓋を開けると爆発しますので…」
「そ、そうか…　ならば、こいつは？」
「水に触れると爆発します」
「こいつは…？」
「温めると爆発を…」
　流石に恐ろしい。
「ここは爆薬専門店なのか…？」
「ちちち、違いますよ！そこの棚は爆発シリーズが並んでいるだけです！」
　爆薬をこんなに多く並べたら逆に危ないと思うのだが。
「再び質問するが、そこまで俺の目が気になるか？」
「…　え？あっ、ごめんなさい…　ちょっと待ってて下さい」
　そう言って、店主は店の裏へと行ってしまう。
「あ、あったあった」
　１分足らずで戻ってくる。手には何か童話の様な本を物を持っている。
「あの、違うかもしれないんですけど、貴方のその目ってもしかして輪廻眼ですか…？」
「お前、輪廻眼を知っているのか…？」

まさか、この世界でその言葉を聞くとは思わなかった。
「えっと、この本の主人公の眼と似てるので、もしかしたらと思って…」
店主は本の表紙を見せる。
確かに、その人物は輪廻眼に似た眼をしている。
「輪廻眼は童話の中だけの話だと思っていたので… あっ、ごめんなさい。自己紹介が遅れました。ウィズと申します」
「長門だ… なあ、その本の著者は誰かとか書いていないのか?」
「実は書いていないんです… でも、内容はとても面白いんです!ぜひナガトさんも読んでみて下さい!」
ウィズが笑顔で俺にこの童話を勧めてくる。
「そうか。なら少し借りるとしよう」
輪廻眼持ちの主人公という点で色々気にはなっているが、それよりも気になるのは…

その主人公が俺と似ている感じがする

ーーーーーー

一方、ダンジョンにて

「いやぁ、それにしても間近で見るナガトさんはかっこよかったな〜！他の人とはオーラが桁違いって感じでさ！」

「……」

「ねえねえ、キミも来れば良かったのに。あたしが居ない間、何やってたの？」

「別に、お前には関係のない事…」

会いたい。

この世界にいるのなら直ぐに…

でも、もう彼に負担は掛けさせたくない…

第６話　リッチー

時刻はそろそろ夕方に差し掛かろうとしている。
今回受けたクエストは、共同墓地に湧く、アンデットモンスターの討伐。
俺達は現在、墓場からちょっと離れた場所で鉄板を敷き、バーベキューをしながら夜を待っている。
「ちょっとカズマ、その肉は私が目をつけてたヤツよ！ほら、こっちの野菜が焼けてるんだからこっち食べなさいよこっち！」
「俺、キャベツ狩り以来どうも野菜が苦手なんだよ、焼いてる途中に飛んだり跳ねたりしないか心配になるから」
確かに、野菜が生き物のように活発に動かれればトラウマにもなるだろう。
俺に限ってはそもそも何も食っていない。
「ナガト、食べないのですか？それとも、具合が悪かったり・・・？」
「いや、そういう訳ではない。朝から野菜炒めしか食べていないから、少々飽き飽きしてるだけだ。遠慮なく食べてくれ」

こんな感じで討伐クエストなのにほのぼのとしているが、今回引き受けたのはゾンビメーカーと呼ばれる小型モンスターの討伐。
ゾンビを操る悪霊の一種で、自らは質の良い死体に乗り移り、手下代わりに数体のゾンビを操るそうだ。
カズマ達が装備やスキルが強くなったと聞き、気晴らしに引き受けてみたという訳だ。

「・・・ 冷えてきたわね。ねえ、引き受けたクエストってゾンビメーカーの討伐よね？私、そんな小物じゃなくて大物アンデットが出そうな予感がするんですけど」
いつの間にか月が昇り、時刻は深夜を回っていた。
「・・・ おい、そういう事言うなよ、それがフラグになったらどうすんだ」
「だが、可能性は充分にある。小物だからと言って気を抜かない方が良い。よし、頃合いだ」
俺達は墓地へと向かう。
クリスから教わった、敵感知スキルを持つカズマを先頭に、俺達は墓地へと歩いていく。
「何だろう、ピリピリ感じる。敵感知に引っかかったな。いるぞ、一体、二体・・・ 三体、

四体…　多くね？」
「たまたまゾンビが繁盛しているだけだろう…　あれは？」
　俺が指差したのは、妖しくも幻想的な青い光。
　魔法陣…　だろうか、その隣には黒のローブを着た人影が見えた。
　…　黒のローブ？
「…　あれ？ゾンビメーカー…　ではない…　気が…　するのですが…」
　めぐみんが自信無さげに呟いた。
「突っ込むか？ゾンビメーカーじゃなかったとしても、こんな時間に墓場にいる以上、アンデットに違いないだろう。なら、アークプリーストのアクアがいれば問題無い」
「ああ…　やけにそわそわしているな、大丈夫か？」
「あ、ああ。大丈夫だ…」
　その時…
「あーーーーーっ!!」
　急にアクアが飛び出し、そのままローブの人影に向かって走り出す。
「ちょっ！おい待て！」
　カズマの制止も聞かずに飛び出していったアクアは、ローブの人影に駆け寄ると、ビシッと人影を指差した。

「リッチーがノコノコこんなところに現れるとは不届きなっ！成敗してやるっ！」
「…　リッチーって何だ？」
「アンデットモンスターの最高峰です。別名『ノーライフキング』大物というより超大物です…」
　アクアの予感が的中した、という事か。
　しかし、先程まで大物アンデットに怯えていたアクアが飛び出すとは…　何か未練でもあるのだろうか。
　それにしても…
「やめてええええ！誰なの!?いきなり現れて、なぜ私の魔法陣を壊そうとするの!?やめて！やめてください！」
「うっさい、黙りなさいアンデット！どうせこの妖しげな魔法陣でロクでもない事企んでるんでしょ、なによ、こんな物！こんな物!!」
「…　あれで超大物なのか？」
「その筈なんですけど…」
　どうにも奴が不良に因縁をつけられてるイジメられっ子に見える。
　…　あいつ、何処かで会ったような気がする。
「やめてー!!この魔法陣は、未だに成仏できない迷える魂達を、天に還してあげるための

物です！ほら、たくさんの魂達が魔法陣から天に昇って行くでしょう!?」
「リッチーの癖に生意気よ！そんな善行はアークプリーストのこの私がやるから、あんたは引っ込んでなさい！見てなさい、そんなちんたらやってないで、この共同墓地ごと浄化してあげるわ！」
「ええっ!?ちょ、やめっ！」
　アクアが容赦なく宣言し、手を広げようとしたが
「…　もうやめてやれ」
「なっ…　!?」
　俺はその手をガッチリと掴む。
「ちょ、離しなさいよ！」
「悪いが、こいつは俺の知り合いだ」
「「…　え？」」

ーーーーーー

顔を見れば、やはりリッチーの正体はウィズだった。
「あの、ありがとうございます…！」
「え、長門ってこのリッチーと知り合いだったの？」
「キャベツ狩りの日に、こいつが経営してる店で会ってな。それよりウィズ、こんな所で何してるんだ？」
「ちょっとナガト！こんな腐ったみかんみたいな奴と喋ってたら、貴方までアンデットが移るわよ！ちょっとそいつにターンアンデットを」
「話くらい聞いてやれよ」
「痛っ!?」
カズマがアクアの後頭部を剣の柄で小突いて黙らせる。
「そ、その…　私は見ての通りリッチー。アンデットの王なんて呼ばれてるくらいですから、私には迷える魂達の話が聞けるんです。この共同墓地の魂の多くはお金が無いためにロクに葬式すらしてもらえず、天に還る事なく毎晩墓場を彷徨っています。それ

で、定期的にここを訪れ、天に還りたがっている子達を送ってあげているんです」

・・・　成る程な。

「それならまあ、しょうがないか。でも、ゾンビを呼び起こすのどうにかならないか？俺達がここに来たのって、ゾンビメーカーを討伐してくれってクエストを受けたからなんだが」

　カズマの言葉に、ウィズは困った表情を浮かべ。

「あ、そうでしたか・・・。その、呼び起こしている訳じゃなく、私がここに来ると、まだ形が残っている死体は私の魔力に反応して勝手に目覚めちゃうんです・・・　その、私としてはこの墓場に埋葬される人達が、迷わず天に還ってくれれば、ここに来る理由も無くなるんですが・・・。えっと、どうしましょう？」

ーーーーーー

「その、お騒がせしてごめんなさい…」
「気にするな。アクアにはキツく言っておく」
結局、俺達はウィズを見逃す事に決めた。
まあ、輪廻眼や童話の事とか聞きたい事は山ほどあるからな。死なれては困る。
俺はまた尋ねたい事があるため、カズマ達を先に帰らせてウィズと二人きりの場を作っていた。
「それで、話というのは?」
「この童話についてだ。この童話の主人公、俺の過去と一致している箇所が多すぎる」
「え…？」
内容をまとめると、幼い頃に両親を亡くし、ずっと独りぼっちだった主人公だったが、親友や師匠との出会いによって『幸せ』という物を実感する。しかし、不幸にも親友を亡くした事により何もかもを信じられなくなってしまい、終いには多くの人間に『痛み』を伝える事となってしまう。そこに同じ血を持つ弟弟子が現れ、主人公に本当の平和を

教える。主人公はやっと自分の間違いを見つけ、人々を助ける為に力を尽くして死んでいく…　といったものだ。
「こいつは何処で手に入れた？」
「えっと、それは貰い物です」
　やはりか…
「姿とかは覚えているか？」
「容姿、ですか？顔とかは帽子とかフードとかで隠していたので分からないです…　ごめんなさい、あまり覚えていないです」
　帽子にフードか…
　以前、俺に金を渡した奴は帽子は被っていなかったが…　あいつみたいなのがもう一人いるのだろうか。
　だが、俺を知っているのは間違いないだろう…

ーーーーーー

墓地からの帰り道

「納得いかないわ！」

アクアは未だに怒っていた。

「しょうがないだろ。あんな良い人討伐する気になれないし」

しかし、リッチーが街で普通に生活してるとか、この街の警備はどうなってんだ。

「でも、穏便に済んで良かったです。いくらアクアがいると言っても、相手はリッチー。もし戦闘になってたら私やカズマは間違いなく死んでいましたよ」

何気なく言うめぐみんの言葉にぎょっとする。

「げ、リッチーってそんなに危険なモンスターなのか？ひょっとするとヤバかった？」

「ヤバいなんてもんじゃないです。リッチーは強力な魔法防御、そして魔法の掛かった武器以外の攻撃の無効果。相手に触れるだけで様々な状態異常を引き起こし、その魔力

や生命力を吸収する伝説級のアンデットモンスター。あの人がナガトの友人で本当に良かったですよ」

ちびりそうになる。

カズマがそんな事を考えると、ダクネスがポツリと言った。

「そういえば、ゾンビメーカーの討伐はどうなるんだ？」

「「あっ」」

クエスト失敗

第7話　湖の駄女神

「知ってるか？なんでも魔王軍の幹部の一人が、この街からちょっと登った丘にある、古い城を乗っ取ったらしいぜ」

ギルドに併設された酒場の一角。

俺は昼間から酒を飲んで駄弁っている、相席している男の話を聞いていた。

面白い話を聞くことが出来たが、そろそろ敵サイドも攻め時なのだろうか。どちらにせよ、物騒な話である。

「ま、何にせよ。街の北の外れにある廃城には近づかない方がいい。王国の首都でもないこんな所に、何で魔王の大幹部様がやってきたのかは知らないがね。幹部ってからには、オーガロードやヴァンパイア。はたまた、アークデーモンかドラゴンか。いずれにせよ、俺達が出会ったら瞬殺される様な化け物が住んでいるのは間違いない。廃城近くでのクエストはしばらく避けた方が無難だな」

「そうか。では俺はそろそろ失礼する。感謝するぞ」

この場を後にし、仲間の元へと戻る。

「戻ったぞ…　どうしたお前たち？」
仲間達が一斉に置いてある野菜スティックを齧りながら俺を見ていた。
「べっつにー？ナガトが他のパーティに入ったりしないか心配なんてしてないし」
アクアが少々不安そうな目でチラチラ見てくる。
「…　俺は単に情報収集しに行っただけだぞ？」
まあ、他を当たりたいという願望はない事はないのだが。
「それは良いとして、北の廃城に魔王軍の幹部が住みついたらしい。そこで、このパーティのチームワークや自身の能力を高めるために、これからは俺がお前達に稽古をつけようと思う」
絶対やべえ…　と一同が第一に恐怖を感じてしまう。
「…　あの、お手柔らかに頼むよ？長門の稽古とか拷問にしか思えないから」
「ご、拷問…　長門殿がその人を痛めつけるような目で拷問を…　！」
カズマの言葉に期待の目で興奮するダクネス。
別の意味で期待されてもな…

ーーーーーー

早速、俺達は修行する為にお目当てのモンスターを探しに掲示板へと向かったが…

「… あれ？何だこれ、依頼が殆ど無いじゃないか」

「… これが一番無難だろう」

『山に出没するブラックファングと呼ばれる巨大熊を…』

「出来るかー！却下だ却下！おい、何だよこれ！高難度のしか残ってないぞ！」

その時、ギルド職員がやって来た。

「ええと… 申し訳ありません。最近、魔王の幹部らしき者が、街の近くの小城に住み着きまして…。その魔王の幹部の影響か、この近辺の弱いモンスターは隠れてしまい、仕事が激減しております。しばらくすれば、国の首都から幹部討伐のための騎士団が派遣

されるので、それまでは、そこに残っている高難易度のお仕事しか…」
やはり魔王軍が近くに住み着くとなると不便だな…
そんな時、アクアがとあるクエストを持ってくる。
「ちょっと、これこれ！これ見なさいよっ!!」
『湖の浄化。街の水源の一つの、湖の水質が悪くなり、ブルータルアリゲーターが住みつき始めたので水の浄化を依頼したい。湖の浄化ができればモンスターは生息地を他に移すため、モンスター討伐はしなくてもいい。※要浄化魔法を習得済みのプリースト。報酬は三十万エリス』
「…　お前、水の浄化なんてできるのか？」
カズマの疑問にアクアが鼻で笑う。
「バカね、私を誰だと思ってるの？と言うか、名前や外見のイメージで、私が何を司る女神かわかるでしょう？」
「宴会を司る女神だろ？」
「違うわよこのヒキニート！水よ！この美しい水色の瞳とこの髪が見えないのっ!?」
確かに、アークプリーストであるアクアにとっては相性の良いモンスターだな。
「でもよ、浄化だけならお前一人でもいいんじゃないか？」
「えっと…　多分、湖を浄化してるとモンスターが邪魔しに寄ってくると思うの。私が

浄化を終えるまで、モンスターから守って欲しいんですけど」
「あ、そういう事か。ちなみにどれぐらいで終わるんだ？五分くらい？」
浄化だけなら短時間に越したことはないだろう。
「・・・半日くらい？」
「長えよ！名前からして危なそうなモンスター相手に、半日も防衛なんかしてられるか！」
「・・・なあ、浄化ってどうやってやるんだ？」
俺はふと疑問に思った事をアクアに尋ねる。
「水の浄化は、私が水に手を触れて浄化魔法でもかけ続けてやればいいんだけど・・・」
「・・・今、安全に浄化出来る手があるんだが、やってみるか？」

――――――

街から少し離れた所にある大きな湖。
「・・・　ねえ。本当にやるの？」
背後から聞こえる凄く不安気なアクアの声。
現在アクアは捕獲クエストで使用する檻の中で体育座りをしている。
カズマが考えた作戦とは、アクアを檻の中に入れ、そのまま湖に投入すること。
檻は鉄鋼製なので浄化中にブルータルアリゲーターが襲ってきても大丈夫らしい。
とはいえ、あまりに危険過ぎると俺は思った。しかし、万が一に備えて頑丈な鎖も付けているそうだ。
それであれば安心だろうと思うが・・・
「・・・　私、ダシを取られてる紅茶のティーバックの気分なんですけど・・・」

ーーーーーー

あれから心がモヤモヤする。
会いに行きたければ会いに行けばいい。
だが、会いに行ってしまったら、また彼に重荷を背負わせる事になってしまう。
いや、彼だけではない。目の前にいる彼女にだって…
「… 一つ、聞きたい事がある」
「ん～？」
「お前は何故、私に付き纏う… ？」
私と彼女が出会ったのは三日前。
きっかけとして偶然、同じダンジョンで探索していた際に「一緒にパーティ組もうよ

！」と真っ先に私に勧誘して来たのでつい流れでノッてしまった。
　出会ってからそんなに時間は経っていない筈なのに、何故彼女は私を親友のように親しんでいるのだろう。
「・・・　深い意味はないけど、とにかくキミと一緒にいたいっていうのはダメかな？」
「私といても楽しくはないと思うが・・・　？」
　先程まで彼女を避けようとしていた私だ。絶対に無理をしているのだろう、そう思っていたが・・・
「ううん、楽しいよ。こうやって側に居られるだけでも」
　えへへっと微笑む相手の思いは、私の予想の斜め上を行っていた。
「それに、キミって何か悩み抱えてるよね？あたし、そうやって悩みを抱えてる人の手助けとかして、誰かの役に立てれる人間になりたいの」
「・・・」
　彼女の言葉で、どこか懐かしさが感じられた。
　今は亡き、あの救世主・・・　あの人はちゃんと天国にいるだろうか。
「成る程。変な事聞いて申し訳ない・・・　悩みというより、私の過去を聞いて欲しい」
「それ凄く聞きたい！あ、そういえば自己紹介まだだったね。私はクリス！キミの名前は？」

「私は……」

――――

浄化を始めてから四時間が経過。
ついにブルータルアリゲーターが襲いかかってきた。
本来のワニとは一味違い、群れで襲いかかるようだ。
最初は、水に浸かって女神の身体に備わった浄化能力だけを使っていたアクアだったが、早く終わらせて帰りたいのか、今は一心不乱に浄化魔法を唱えまくってる。

「『ピュリフィケーション』！『ピュリフィケーション』！『ピュリフィケーション』！」
　アクアが入っている鋼鉄製の檻を大量のワニ達が囲み、檻をガジガジと齧っている。
「…　流石に助けた方が良いんじゃないのか？このままじゃアクアのメンタルが持たないぞ…　？」
「アクアー！ギブアップなら、そう言えよー！そしたら鎖引っ張って檻ごと引きずって逃げてやるからー！」
　しかし、アクアは怯えながらも頑なにクエストのリタイアを拒んでいた。
「イ、イヤよ！ここで諦めちゃ今までの時間が無駄になるし、何より報酬が貰えないじゃないのよ！『ピュリフィケーション』！『ピュリフィケーション』ッッ！…　わ、わああああーっ！メキッていった！今オリから、鳴っちゃいけない音が鳴った!!」
　その光景を見て、ダクネスが呟く。
「…　あのオリの中、ちょっとだけ楽しそうだな…」
「「…　行くなよ？」」

　浄化を始めてから七時間が経過。
「…　おいアクア、無事か？ブルータルアリゲーター達は、もう全部、どっか行ったぞ」

俺達はオリへ近づき、檻の中のアクアを窺った。
「…　ぐす…　ひっく…　えっく…」
「膝抱えてまで泣くくらいならリタイアすれば良かったんじゃないか…？」
まあ、あの状況では無理もないか…。
「ほら、浄化が終わったのなら帰るぞ。あと、今回の報酬はお前が全部持ってっていいから」
体育座りで顔を埋めたアクアの肩がぴくりと動いたが、檻から出てくる気配はない。
「はぁ…　歩けないのなら俺が背負うから。ほら、乗れ」
俺がアクアを背負う体勢になると、アクアが小さな声で呟くのが聞こえた。
「……　まま連れてって……」
「……　え？」
「…　檻の外の世界は怖いから、このまま街まで連れてって」
…　今回のクエストは修行というより、アクアの新たなトラウマを植え付けた様だ。

第８話　へっぽこ勇者と魔剣

「ドナドナドーナードーナー……」

「…お、おいアクア、もう街中なんだからその歌は止めてくれ。ボロボロのオリに入って膝抱えた女を運んでる時点で、ただでさえ街の住人に注目されてるんだからな？というか、もう安全な街の中なんだから、いい加減出てこいよ」

「嫌よ。この中こそが私の聖域よ。怖いからしばらく出たくないわ」

すっかり檻の中に引きこもってしまったアクアを、馬車で引きながら。

トラウマを植え付けたものの、最後まで諦めずに立ち向かったアクアの勇姿は素晴らしく感じた。

後でわがままでも聞いてやるか…

「め、女神様っ!?女神様じゃないですかっ！何をしているのですか、そんな所で！」

突然叫んで、檻に引きこもっているアクアに駆け寄り、鉄格子を掴む男。

そいつはあろう事か、ブルータルアリゲーターが齧り付いても破壊できなかったオリの鉄格子を、いとも容易くグニャリと捻じ曲げ、中のアクアに手を差し伸べた。

唖然としている俺達を尻目に、その中の見知らぬ男は、同じく唖然としているアクアの手を…

「…おい、私の仲間に馴れ馴れしく触るな。貴様、何者だ？知り合いにしては、アクアがお前に反応していないのだが」

ダクネスは男に詰め寄った。

「あいつ、いつもこんな感じでいてくれたらなあ…」

カズマの呟きに俺は同感するしかなかった。

男はダクネスを一瞥すると、ため息を吐きながら首を振る。

きな臭い雰囲気になってきたので、カズマはこの期に及んでも膝を抱えて檻から出ようとしないアクアに、そっと耳打ちする。

「…おい、あれお前の知り合いなんだろ？女神様とか言ってたし。お前があの男を何とかしろよ」

「…ああっ！女神！そう、そうよ、女神よ私は。それで？女神のこの私にこの状況をどうにかして欲しいわけね？しょうがないわね！」

ようやく外の世界へと出てきたアクアは、男に対して首を傾げる。

「…あんた誰？」

知り合いではないのか、と思っていたが男は驚きの表情を見せている。

「何言ってるんですか女神様！僕です、御剣響夜ですよ！あなたに魔剣グラムを頂いた!!」

「頂いた」ということはこいつは俺やカズマと同じ転生者だろう。

後ろには、槍を持った戦士風の少女と、革鎧を着て、腰にダガーをぶら下げている少女を引き連れている。

「ああっ！いたわね、そんな人も！ごめんね、すっかり忘れてたわ。だって結構な数の人を送ったし、忘れてたってしょうがないわよね！」

ようやく思い出したらしい。

若干表情を引きつらせながらも、ミツルギはアクアに笑いかけた。

お久しぶりですアクア様。あなたに選ばれた勇者として、日々頑張ってますよ。職業はソードマスター。レベルは３７まで上がりました。ところで、アクア様はどうしてここに？というか、どうしてオリの中に……」

「…バカな。ありえないそんな事！君は一体何を考えているんですか!?女神様をこの世界に引き込んで!?しかも、今回のクエストではオリに閉じ込めて湖に浸けた!?」

ミツルギは、これまでの経緯を隅まで説明したカズマの胸ぐらを掴んだ。

「…アクア様、こんな男にどう丸め込まれたのかは知りませんが、今の貴女の扱いは不当ですよ。ちなみに、今は何処で寝泊まりしているんです？」
ミツルギの言葉に、アクアが若干押されながらも答えた。
「え、えっと、馬小屋で…」
「は!?」
ミツルギの、カズマの胸ぐらを掴む手に力が込められた。
流石に止めた方が良いか…。
「放してやれ。強引に振舞っても何も得はしないぞ」
ミツルギは俺の言葉で手を放すと、俺らを見回した。
「クルセイダーにアークウィザード？それに、随分綺麗な人達だな…。君はパーティーメンバーに恵まれているんだね。それなら尚更だよ。君は、アクア様やこんな優秀そうな人達を馬小屋で寝泊りさせて、恥ずかしいとは思わないのか？さっきの話じゃ、就いてる職業も、最弱職の冒険者らしいじゃないか」
「さりげなくナガトの事スルーしましたよ……」
「長門殿がどれほどの冒険者か知らないのか……？」
ん、省かれていたのか……？
特にそういうのは気にしないので気付かなかった。

二人の不機嫌な表情も御構い無しに、ミツルギが同情するかの様に、憐れみの混じった表情で笑いかけた。

「君達、今まで苦労したんだね。これからは僕と一緒に来るといい。というか、パーティーの構成的にもバランスが取れてていいじゃないか。ソードマスターの僕に、僕の仲間の戦士と、そしてクルセイダーのあなた。僕の仲間の盗賊と、アークウィザードのその子にアクア様。まるであつらえたようにぴったりなパーティー構成じゃないか！」

身勝手な提案に、俺とカズマ以外の三人はひそひそと囁き出した。

聞き耳を立ててみると、どうやら大不評らしい。

と、ここで俺はある考えを思いつく。

「こいつらが欲しいのならばくれてやる」

「「!?!?」」

ほぼ全員が驚きの反応を見せる。

途端に言われればこの反応は無理もないか…。

「本当かい？いやあ、君なら分かって…」

「ただし条件がある。俺と勝負をしろ。お前がこいつらを連れるのに相応しい人間かを試す勝負だ。お前が勝てば譲ってやろう。だが、俺が勝てば一つ言う事を聞いてもらう。どうだ？上級職のお前なら容易い話だろ？」

それに、こいつらに真面目に俺の戦いを見せた事はないからな。丁度良いだろう。

「それで構わないけど、最弱職の冒険者に見える君が高レベルの僕に勝負を挑んで大丈夫なのかい？」

「実戦してみなければ分かるまい。だが、ここじゃ周りに迷惑がかかる。場所を変えるぞ」

ーーーーー

「ここなら問題ないだろう」

ここは人気のなく自然の多い広い空き地。
「長門。大丈夫だよな？あまり無茶すんなよ？」
カズマが心配してくれているが、無茶する事なくすぐ片付くだろう
俺はそんな余裕を見せる。
「随分余裕そうな顔してるけど、僕にはこの最強の魔剣グラムがあるからね。すぐに終わらせてあげるよ」
「そうか。なら、俺はこいつで行くとしよう…『口寄せの術』」
地面に掌を当てると、突如巨大な煙が舞う。
そして、煙の中から出てきたのは……

グルルルルルル……!!

「「…は？」」
巨大な犬、というより頭が二つあるのでケルベロスの様な動物だろう。
一同は固まってその巨大なケルベロスを見つめていた。

「お、おい…何だよそれ…」
　ミツルギは恐怖のあまり尻餅をついてしまった。
「先程の威勢はどうした?もしや、恐怖で怯えて立ち上がれないという訳じゃないだろうな?」
「そ、そんなこと…あるはずが、ない…だろ?」
　ミツルギは体が震えてしまうも立ち上がる事は出来たようだ。
「あんな隠し玉を持っていたなんて…凄いというより怖いです」
「もうそいつ使って魔王倒しに行けばいいのに…」
「あのさ…私、トイレに行きたくなったんだけど…」
「それより長門殿のあの人を見下すような目…ああ堪らない…!」
「お前に関してはもう恐怖通り越してるじゃねえか」
　カズマ達がボソボソと呟きながら二人の戦いを観戦している。
　その目はまるで悟りを開いたような目であった。
「ぼ、僕を舐めるなあ…!!」
　ミツルギは剣をがっしりと構えてケルベロスに真っ直ぐに立ち向かう。
「グルルルルルル……!」
　ケルベロスはまるでミツルギを食べたそうに鼻息を荒く、よだれを垂らしながら興奮

している。
「おりゃあああ!!」
怯える事なく剣を振るう。しかし…
「ガアアアアア!!」
ケルベロスが威嚇し、その衝撃で吹き飛ばされてしまう。
「これでは話にならんな…どうする、まだ戦うか?」
ミツルギはもう敵わないと思ったのか、何度も頷いて負けを認めた。
「あ、あんなの倒せる訳ないじゃない!」
「そうよ、最低!正々堂々と戦いなさいよ、卑怯者!」
少女達の罵倒など聞こえていないかのように俺はケルベロスを封印する。
そういや、言う事一つ聞いてもらうんだったな。
「…カズマは何か案はあるか?」
「え、俺?それじゃあ、この魔剣を」
その言葉に取り巻きの一人がいきり立つ。
「なっ!?バ、バカ言ってんじゃないわよ!それに、その魔剣はキョウヤにしか使いこなせないわ。魔剣は持ち主を選ぶのよ。既にその剣は、キョウヤを持ち主と認めたのよ?あんたには、魔剣の加護は効果がないわ!」

「…マジか～、せっかく強力な装備を巻き上げたと思ったんだけど」
こんな剣さばきが鈍い奴でも認められるんだな…と俺は複雑そうに魔剣を見つめる。
その時だった…
『緊急！緊急！全冒険者の皆さんは、直ちに武装し、戦闘態勢で街の正門に集まって下さいっっ！』
「とうとう魔王軍らが動いたか…」
俺達は直ちに現場に向かう。
「あ、あれ…？僕の魔剣は…？」

「まままま、毎日毎日毎日毎日っ!!おお、俺の城に、毎日欠かさず爆裂魔法撃ち込んでく頭のおかしい大馬鹿は、誰だあああああ―!!!」

第９話　罪ある魔王幹部に、痛みを

ずっと何かに耐えていたが、とうとう我慢できずに切れてしまったというような魔王の幹部の一人、デュラハンの怒り狂った叫びに、俺の周りの冒険者達はざわついた。

というか、この場の誰もが、何が起こっているか状況が掴めていないようだった。

「…爆裂魔法？」

「爆裂魔法と言ったら…」

俺の隣に立つめぐみんへ、自然と周りの視線が集まった。

隣をチラッと見ると、当の本人はもちろんカズマまでもが冷や汗を垂らしている。

「お前ら…」

「イヤ、アノデスネ。この馬鹿が「あの建物ぶっ放して良いですか!?」って目輝かせながら聞いてきて、その時はそこに幹部が住み着いてるなんて知らなかったから毎日何度も何度も…」

どんどんカズマの声が小さくなる。その上、震えも大きくなってきている。

やがてめぐみんがため息を吐き、前へ出た。

それに伴って、冒険者達がデュラハンへの道を空けてくれる。

「お前が…！お前が、毎日毎日俺の城に爆裂魔法ぶち込んで行く大馬鹿者か！俺が魔王軍幹部だと知っていて喧嘩を売っているなら、堂々と城に攻めてくるがいい！その気が無いのなら、街で震えているがいい！何故こんな陰湿な嫌がらせをする!?どうせ雑魚しかいない街だと放置しておれば、調子に乗って毎日毎日…」

もうこいつの話は聞いていられない…俺はデュラハンの目の前まで飛び出し、クナイの矛先を相手に向ける。

「な、何だ貴様は…！」

「魔王軍の幹部とやらの怒鳴り声が耳障りだったからな。少し黙らせてやった」

そう言うと、デュラハンの肩が更にプルプルと震える。

表情はみえないが、どうやら余計に怒らせてしまったようだ

「…おい貴様。俺がその気になれば、この街の冒険者、いや住人までもを皆殺しにする事だって出来るのだ。この程度で見逃して貰えると思うなよ?疲れを知らぬこの俺の不死の体。お前らでは傷もつけられぬわ！」

限界がきたのか、デュラハンは不穏な空気を滲ませる。

「まずはそこの赤髪、貴様からだ！この俺はベルディア。魔王軍幹部が一人、デュラハンのベルディアだ！」

「長門だ。さて、魔王軍幹部の力、見させてもらうぞ…！」

そう言って俺はクナイを、ベルディアは大剣を構えて立ち向かう。

ーーーーーー

カズマｓｉｄｅ

俺達は２人の戦いに唖然としていた。

武器の擦れる音が先程から鳴り響きっぱなしである。逆に止んだとしても脳内再生してしまいそうだ。

ベルディアは頭を空へ投げると、長門の体術や忍術を全て見切り、多少ダメージを負っても致命傷まではいかなかった。

一方、長門も多少のかすり傷は負っているものの、じわじわとダメージを負わせている。

「…何で」

「えっ…？」

先程まで黙り込んでいためぐみんが口を開いた。

「何でナガトは私を庇ってまで…。いくらナガトでも相手は魔王幹部、今までのモンスターとは桁違いだと分かっている筈です。それなのに…」

何も出来ない自分を情けないと思ったのだろう。俺はめぐみんの頭にそっと手を置いた。

「ったく、長門がやられる姿なんて普通イメージ浮かぶか？」

「……いや、むしろ浮かびたくないです」

「だろ？だから自信持て…って」

ふと振り返ってみると、肩から血を流しながら膝をついている長門の姿が。

「嘘だろォォォ!?!?」

ーーーーーー

「ぐっ……！読まれていたのか……！」

「フハハハハ！少々手こずったが貴様は隙を見つければ簡単に攻略出来る弱者だったようだな!!」

肩から流れる血が一向に止まらない。ここまで深くやられるとは、流石に油断したか…。

「ほう、出血多量で動けないようだな。もう少し楽しませてくれるかと思ったのだが、残念だ」

ベルディアは大剣を構えながらゆっくり俺の前へと進む。

そして、勢い良く振りかざした。

「死ねぇぇぇ!!!」

『餓鬼道』

「さて、茶番はここまでとしよう」

「何っ…魔力が吸い取られているだと!?」

餓鬼道

相手の術を吸収し、吸収したチャクラや魔力を自身に転換できる六道の能力の一つ。

俺は大剣を両手で受け止め、そこからベルディアの魔力を徐々に吸収していく。

「本来ならすぐにお前を片付けたかったのだが、先程使った口寄せで無駄にチャクラを消費してしまったからな。お前を足止めしながらチャクラを溜めていたのさ」

「手加減していたという事か、畜生…！というか、さっさと離しやがれ！」
要約すればベルディアの言う通り、手加減をしていた。だが、怪我を負う所までは予想外だった。
俺は十分にチャクラが溜まったのを感じると、ベルディアの望み通り離してやった。
無論、簡単に呼吸を整わせようとはしなかった。
俺は手を前へかざし、チャクラを一点に集中させる。
「これで終わりだ。『痛みを知れ』」

『神羅転征』

ドゴーーーン!!!
俺が放った波動は、ベルディアの鎧を跡形もなく吹き飛ばした。
辺りが沈黙していた。もしかしたら終始沈黙の状態だったかもしれない。
「そういやこいつはアンデットだったな。アクア、浄化を頼む」
「…えっ、あ、うん。もう終わったんだ…。」

『セイクリッド・ターンアンデット！』

口をポカーンとしていたアクアは俺の言葉で正気に戻り、すぐさまアンデット魔法を唱え始めた。
「この、俺が…こんな、奴に…畜生っ…！」
捨て台詞を言い残し、ベルディアは浄化した。
その後、辺りは騒然とし、俺を宴やら何やらに誘って来たが同行するつもりもなく、パーティメンバーとギルドへと戻ろうとした。
「あの！」
その中で、俺を引き留めた者が１人。めぐみんだった。
「何故ナガトは私を庇ってまであいつに立ち向かったのですか!?私が前に出ていればそのような怪我を負わずに済んだのに…！」
めぐみんは自分の愚かさ、情けなさを噛み締めながら俺に必死に問いかけていた。
「…昔の俺であればこんな事はしなかっただろうな」
「えっ……？」
「俺には親友がいてな、そいつは俺が選択を誤った所為で死んでしまった。だから、もう仲間を死なせたくはなかった。要するにあれは単なる俺の身勝手な行動だ」
その身勝手な行動によって今度は仲間を不安にさせてしまったか。人の感情というのは読み取るのが難しいな。

「それでも、何も出来ずにただ迷惑をかけた私の責任です。ナガトを巻き込むことなんてしたくは…」
「何故そこまで自らを否定するんだ?それに、めぐみんの行った事は好材料だったぞ。ペルディアをおびき出す事が出来たのだからな」
そう言って俺はめぐみんの頭を撫でる。
「自分に自信を持て。誰もお前を責める奴なんていない」
「…はい!」
「おーい、早く飯食いに行こうぜ〜」
カズマ達が呼びかけてくる。とはいえ、まずは傷を癒してからだが。
「ほら、行くぞ。みんなが待ってる」
「…全く、私含めて馬鹿ばっかりのパーティですね!」
そうだな。俺もかなりの大馬鹿だ。

第２章
第１０話　愚かな失態

「何してくれとんじゃこのエセチート野郎がああああ!!!!!」
「だから、すまなかったと言っているだろう…？」
俺は今、パーティメンバーに体を勢いよく揺さぶられている。
事の発端は以前のベルディア討伐の時。俺の放った神羅転征がチャクラを限界まで溜めて放ったものだった為、威力が広範囲へと広がってしまった。その影響で、街のの建物のほとんどが破損、５億エリスもの罰金額となり、一文無しとなってしまった。
街の反対側に放ったつもりだったのだが、あまりにも膨大なチャクラを使ったからか威力が溢れてしまったのだろう。
というか、エセチートって何だ？
「すまなかったで済むんだったら５億も払わねえだろうが！あの首無し野郎倒すのに必死だったのは分かんなくもないが、それでもちょっとは自分の術の規模考えろや!!」
「ねえ、私達、今一文無しなのよ!?今まで稼いだお金全部パーになったのよ!?何も買えな

いし泊まるところも馬小屋しかないし、この罪の重さ分かってんの!?」
「…だが、借金をしなかっただけマシだろう。今までの分はクエストで取り返せばいいんじゃないか?」
「「おい、こいつ反省してねえぞ」」
いや、申し訳ないとは本気で思っているのだが…。

ーーー

現在、ギルドの掲示板の依頼は選び放題な状態である。冬になるとモンスターが活発に活動するそうだ。
俺達は掲示板に近づくと、良い仕事はないか目を通すが、
「…報酬は良いのばかりだが、本気でロクなクエストが残って無いな…」
「そうか?どれも興味深いものばかりだと思うのだが」
牧場を襲う白狼の群れの討伐、百万エリス。
冬眠から覚めてしまった一撃熊が畑に出没。討伐なら二百万、追い払うなら五十万。

「いやいや、狼の群れなんて大型犬よりデカくて速いのが大量に襲ってくるとか無理だから。あと、熊は論外。長門やダクネスならともかく、俺やめぐみんが攻撃を喰らったら、首を撫でられただけで即死だろうが。一撃熊とかそもそも名前が物騒だし関わりたくねえよ」

「…機動要塞デストロイヤー接近中につき、進路予測の為の偵察募集？機動要塞デストロイヤーって何だ？」

「デストロイヤーはデストロイヤーだ。大きくて、高速機動する要塞だ」

「ワシャワシャ動いて全てを蹂躙する、子供達に妙に人気のある奴です」

全くもってイメージが出来ない。

ダクネスやめぐみんの話を聞き流し、再びクエストを読み漁る。

するとカズマがあるクエストに手をやる。

「なあ、雪精討伐って何だ？名前からしてそんなに強そうに聞こえないんだけど」

雪精を一匹討伐する毎に十万エリス。

それが無難だろう。危険ではなさそうだしな。

「雪精はとても弱いモンスターです。雪深い雪原に多くいると言われ、剣で斬れば簡単に四散させることができます。ですが…」

めぐみんの言葉に、カズマはその張り紙を剥がし取る。

「雪精の討伐？雪精は、特に人に危害を加えるモンスターって訳じゃないけども、一匹倒す毎に春が半日早くなるって言われてるモンスターよ。その仕事を請けるなら、私も準備してくるわね」

アクアはちょっと待っててと言い残すとどこかへ向かった。

めぐみんは雪精の討伐のクエストに文句はなさそうだ。

と、ダクネスがぽつりと呟く。

「雪精か…」

「ん、やけに機嫌が良いな。何か思い入れがあるのか？」

「ま、まあ、そうだな…」

ダクネスの様子に違和感を覚えながらも、俺達はアクアを待って、雪精討伐に出発した。

ーーー

「ねーねー、キミとパーティを組んでから一度も実力を見てない気がするんだけど、そろ

そろ見せたって良いんじゃないかなー？」
「…お前が何時もダンジョン探索に連れ回すからだろう？それに、私の術は見世物ではない」
「うぅ～、ケチだなあ」
　唸りながら私を威嚇する小さな盗賊。
　しかし、だからといって見せない訳にもいかない。高難易度のクエストに行く時に上手く連携出来ない等、支障が出てしまう。
「なら、力試しに一撃熊の討伐でもしに行きましょうか。名称的に手強いかもしれないけれど…」
「おぉ、愚痴を吐いた直後に提案してくるとは…。でも、キミの実力が見れるならどんなクエストでも引き受けるよ！」
　こうして、私達は準備運動がてら一撃熊一頭の討伐へと向かうのだった。
　だが、この後あのような事態になる事に、私は知る由も無かった。

第11話　冬の精霊

街から離れたところにある平原地帯。
街にはまだ雪は降っていないはずなのに、そこだけが雪で一面真っ白に輝いていた。
そして、そこかしこに白くてフワフワと浮かんでいる手のひらサイズの丸い塊が漂っていた。
これが雪精なのだろう。見るからに危険は無さそうだ。
「……お前、その格好どうにかならないのかよ」
背後から呆れたように言葉を発したカズマの声が聞こえた。
見ると、捕虫網といくつかの小さな瓶を抱えた、冬場に虫捕りに行く子供のようなアクアの姿があった。
「これで雪精を捕まえて、この小瓶に入れておくの！で、冷蔵庫代わりにして箱の中に入れておけば冷たい飲み物が飲めるってわけ！どう？頭良いでしょう！」
「何かオチが読めるんだが……まあいいや」
「……で、ダクネス、鎧はどうした？」
「修理中だ」

アクアに続き、うちのパーティーの壁役、ダクネスが、鎧も着けずに私服姿で、大剣だけ携えていた。
「……そういえば、この間何も告げずにクエストに行っていたらしいが、その影響か？というより、その格好で寒くないのか？」
「大丈夫だ。少し寒いが、我慢大会みたいでそれもまた……」
……興奮で体温を温めているのだろうか。
少しばかり気色悪いが、本人が問題ないのであれば、まあいいだろう。
気を取り直して、俺達は雪精討伐を開始した。

☆

『火遁・鳳仙花の術!』

雪精の討伐に俺達はかなり手こずっていた。

近づかなければゆっくり漂っているのだが、何か物体が近づくと突然素早い動きで逃げる雪精。

こいつに攻撃を当てるのは困難だ。

これならば1匹十万というのは分かる気もする。

こういう時にイタチの術は本当に便利だな…。

「四匹目の雪精捕ったー!・やったわ!・大漁よー!・」

嬉々とした表情で雪精を小瓶に詰めるアクア。

「私とダクネスで追い回しても、すばしっこくて当てられません……。爆裂魔法で辺り一面ぶっ飛ばしていいですか?」

ダクネスと二人で追い回し、杖で叩き、ようやく一匹仕留めためぐみんが、荒い息を吐きながら言ってきた。

「おし、頼むよめぐみん。まとめて一掃してくれ」

カズマの言葉に頷くとめぐみんが嬉々として呪文を唱える。

『エクスプロージョン』ッッッ！」

一日に一度しか使えない、めぐみんの必殺魔法が雪原に放たれる。

冷たく乾いた空気をビリビリと振動させて、轟音と共に、白い雪原のど真ん中に茶色い地面を剥き出させたクレーターを作り上げた。

魔力を使い果たしためぐみんが、雪の中にうつ伏せに倒れたまま、自分の冒険者カードを自慢気に見せてきた。

「見てください！八匹！八匹もやりましたよ。レベルも一つ上がりました！」

これで、カズマが三匹、めぐみんが九匹、俺が十六匹。現在の討伐総数は二十八匹、二百八十万エリス。

一時間近くでかなり稼いだな。

「なんだよ、このクエスト美味しすぎるだろ。ほぼ長門のおかげだけど、それでも何でこんな弱くて美味しい雪精討伐を誰もやらないんだよ」

そんなカズマの疑問に答えるかの様に。俺達の前に、それは突然現れた。

「……ん、出たな！」

ダクネスがそいつを見て、大剣を嬉しそうに構えてほくそ笑む。

「……」

先程まで勝ち誇ってためぐみんは、うつ伏せのまま、無言で死んだフリをしている。

「……カズマ。なぜ冬になると、冒険者達がクエストを受けなくなるのか。その理由を教えてあげるわ」

アクアが一歩後ずさり、そして、それから僅かにも目を逸らさずに。

俺達の視線を集めるそれは、ズシャリと一歩、前に出た。

「あなたも日本に住んでいたんだし、昔から、この時季になると天気予報やニュースで名前ぐらいは聞いたでしょう？」

全身を白く染め上げた重厚な鎧姿のそれは、俺達に途方も無い殺気を浴びせつけていた。

「雪精達の主にして、冬の風物詩とも言われている…」

武士を思わせるような重厚な鎧兜に、同じく真っ白で、素晴らしくキメ細やかな陣羽織。

そして、白い総面を付けた鎧武者が、白い冷気を漂わせる刀を握り立っていた。

「そう。冬将軍の到来よ」

「バカだ！このクソッタレな世界の連中は、人も食い物もモンスターも、みんな揃って大バカだ～～～!!!」

恐ろしく斬れそうな抜き身の刀を煌めかせ、冬将軍が一番近くにいたダクネスに斬りかかった。

「くっ!?」
　ダクネスが、大剣で受けようとするが、キンッと澄んだ音を立てあっさりと真っ二つに叩き折られた。
「ああっ!?わ、私の剣が……!?」
　俺達の中では最も防御に特化しているダクネスですら一瞬で無力化されてしまった。
　アクアが、冬将軍と、それと、戦うダクネスから距離を取り……
「冬将軍。国から高額賞金をかけられている特別指定モンスターの一種よ。冬将軍は冬の精霊……。精霊は元々は決まった実体を持たないわ。出会った人達の無意識に思い描く思念を受け、その姿へと実体化するの。火の精霊は、全てを焼き尽くす炎の貪欲さから、凶暴そうな火トカゲに。水の精霊といえば、清らかで格好良く知的で美しい水の女神を連想して、美しい乙女の姿に。……でも、冬の精霊の場合はちょっと特殊でね？危険なモンスターが蔓延る冬は、街の人間どころか、冒険者達ですら出歩かないから、冬の精霊に出会う事自体が稀だったのよ。……そう、日本から来たチート持ち連中以外はね」
「…つまりこいつは、日本から来たどっかのアホが、冬といえば冬将軍みたいなノリで連想して生まれたのか？なんて迷惑な話なんだよ、どうすんだこれ。冬の精霊なんてどう戦えばいいんだよ!?」

少なくとも近接戦は避けた方が良さそうだ。
ダクネスの大剣があっさりと破られたのだから、俺のクナイが通じる筈がない。
つまり、この戦いで有利なのは俺とめぐみんだけだ。
だが、めぐみんはご覧の通り魔力を使い果たして倒れている。
「お前達、どこか遠くへ離れていろ…。爆裂魔法並の術を放つ…！」
『火遁・豪炎球!!』
息を思いっきり吸いながら印を結び、吐いた瞬間、豪火球よりも遥かに大きい火の球を冬将軍にぶつける。
雪原地帯を火で埋め尽くすのと同時に、冬将軍に命中。天に届く程の爆炎を巻き起こした。
「……へへっ、なーにが冬将軍だよ！お前みたいなのなんて長門がいればイチコロなんだ……」
カズマが余裕ぶった発言をした直後、一同は絶望した。
「……ぐはっ!!」

俺はこの一瞬が訪れるまで倒したという思いしか込められなかった。

だが、

奴はまだ動いていた。

豪炎球によって確かに鎧や兜は剥がれていた。

だが、それもほんの僅かだった。奴の防具は俺達の予想を上回る程頑丈だったのだ。

流石は冬の精霊、一筋縄では行かなかったようだ。

だが、絶望したのはそれだけではない。

「こいつ……俺の傷口を狙って……」

冬将軍は爆煙の中で姿や気配を消し、俺を斬り裂いた。

その箇所が、以前のベルディア戦で深傷を負った傷口だったのだ。

まるで俺の弱点を知っていたように……。

俺は過度なダメージでついに気を失ってしまった。

☆

カズマｓｉｄｅ

「…えっ、ちょっ、長門!?おいどうすんだよ！長門やられちまったんだけど!?」

やばいやばいやばい！

長門でも倒せないんだったら俺達じゃ太刀打ち出来ねえよ!?

俺があたふたしていると、アクアが急に手にしていた小瓶の蓋を開け、せっかく捕まえた雪精達を解放しだした。

「カズマ、聞きなさい！冬将軍は寛大よ！きちんと礼を尽くして謝れば、見逃してくれるわ！」

アクアはそう言って、白い雪が積もる雪原に、そのまま素早くひれ伏した。

「ＤＯＧＥＺＡよ！ＤＯＧＥＺＡをするの！ほら、皆も武器を捨てて早くして！謝って

!!」

ペタリと頭を雪につけ、プライドなどそこらに落としてきた元なんとか様は、見事な土下座を行った。

その影響で冬将軍は、確かに土下座したアクアには目もくれなくなった。

その分、俺とダクネスにその視線が向けられた。

その視線を受け、俺も慌てて土下座を……！

…と、俺の隣ではダクネスが、未だに突っ立ったままでいる。

「おい何やってんだよ、早くお前も頭を下げろ！」

「くっ……！私にだって、聖騎士であるプライドがある！誰も見ていないとはいえ、怖いからとモンスターに頭を下げる訳には……！」

「いつもはモンスターにホイホイついて行こうとするお前が、どうしてこんな時だけ下らないプライドを見せるんだ！」

面倒くさい事を言い出したダクネスの頭を左手で掴み、そのまま無理矢理下げさせた。

「や、やめろぉ！くっ、下げたくもない頭を無理矢理下げさせられ、地に顔をつけられるとかどんなご褒美だ！ああ、雪が冷たい……！」

「ていうか、カズマ武器武器！早く手に持ってる剣を捨てて!!」

冷たい雪原の上に頭をつけながら、俺は右手に剣を握ったままだった事を思い出す。
俺は慌てて剣を投げ捨てた！
慌てたためか、自然と頭が雪から離れ……
頭を下げてしまった俺の目に飛び込んできたのは、鞘に収めた刀のツバの部分に、左手を添えた冬将軍。
視線の先では、冬将軍の左手の親指が刀のツバをそっと押し、白刃を僅かに覗かせていた。
俗に言う居合の構えである。
「ギャーーーごめんなさいごめんなさい！違うんです！武器を捨てただけなんです!!本当なんです!!許してくださいお願いします何でもしますから……」
刹那
ドゴォォォン!!!
突然、冬将軍が爆破した。
というのも、直前に神のような物が一枚、冬将軍の体内に入っていくのが見えた。
めぐみんは魔力尽きて倒れてるし、一体誰が……？

「随分と手こずっているようね」
「……えっ？」
声がした方を見ると、翼の生えた天使のような美女が俺の目に映っていた。

第１２話　親友との再会

カズマｓｉｄｅ

「あ、貴女は……？」

今、俺の目には翼の生えた天使のような美女が映っている。

冬将軍は美女に気づき、矛先を向けた。

だが、彼女は精霊相手に一切動じていなかった。

「これが冬の精霊、冬将軍。火遁も飲み込むほどの頑丈な鎧兜……かなり焦っていたようね、長門」

え、何で長門の名前を知ってるんだ……？

彼女は自分の体を紙へと変化させ、それを冬将軍へと張り付けた。

拘束しているのだろう。当の冬将軍は苦しそうにもがいている。

「生き物というのは、必ず何処かしらに弱点があるもの。例え、それが精霊やアンデットモンスターであっても……」

この人、何で冬将軍相手にこんな余裕なんだ……？

もう倒したような雰囲気出してるし……俺がそう疑問に思った瞬間

ドドドドオオオーン!!!

「「?!?!?!」」

急に冬将軍が爆発し出した。

先程から何が何やら分からなくなってきた。この人は一体何者なのだろうか……。

やがて冬将軍はその場にバタリと倒れていった。

「ちょっ、あんた何者なの…?急に出て来たと思ったらあいつを瞬殺しちゃうし…」

「話はその後。それよりも、誰か早く長門に治癒魔法をかけてあげて」

☆

目を覚ますと辺りは真っ白な神殿という、見覚えのある場所だった。
そうか、俺は死んだのか。
倒せたと思って油断した俺の自業自得だが、こればかりは仕方がない……。
そして、目の前には見覚えのある女神様の姿があった。
「長門さん、ようこそ死後の世界へ。残念ながら貴方の第2の人生は終わりを告げました」
「聞き覚えのある台詞だな」
「そうですね。死んでしまいましたから」
「それにしても、皆にみっともない姿を晒してしまったな……」
一斬りで死んだという俺にとっては何とも情け無い醜態を晒してしまったことに深い溜息をつく。
だが、エリスは憂いを帯びた表情で首を振ると、
「何も恥じることなどありません。貴方の仲間を守る勇姿はとても立派でしたよ……」
言いながら、エリスは悲しげに目を閉じた。

彼女の悲しそうな顔を見ていると、切ないというか申し訳ないというか、そんな感情が芽生えてくる。

「せめて私の力で、次は平和な世界で、裕福な家庭に生まれ、不自由なく暮らせるように。幸せな人生が送れるような場所に転生させてあげましょう」

そうか、死んだら天国で暮らすか、一から人生をやり直すかのどちらかだったな。

短い間だったが、ほんの少しだけ楽しむことは出来たと思う。

奴らと会えなくなるのは心残りだが、仕方ない……。

「……ああ、頼む」

俺の言葉に、エリスが哀しそうに目を伏せる。

そして俺に右手をかざし……。

『さあ帰ってきなさいナガト！こんな所で何をあっさり殺されてんの！あんたがいなきゃ私達何も出来ないんだから、死ぬにはまだ早いわよ！』

突然聞こえてきたアクアの声。

脳に大音量で響いてきたので、頭部が激痛を走った。

「なっ!?この声は、アクア先輩!?随分先輩に似たプリーストだなと思っていたら、まさか本物!?」

エリスは目を見開き、虚空を見つめて声を張り上げていた。
『ちょっとナガト、聞こえる?あんたの身体にリザレクションって魔法をかけたから、もうこっちに帰って来れるわよ。今、あんたの目の前に女神がいるでしょう?その子にこちらへの門を出してもらいなさい』
成る程、アクアの蘇生魔法か。
そういえば、デュラハンに斬られた冒険者達を蘇生させていたらしいな。
「ちょちょ、ちょっと待ってください!ダメですダメです、申し訳ありませんが、長門さんは既に一度生き返っていますから、天界規定によりこれ以上の蘇生は出来ません!アクア先輩と繋がっているあなたじゃないと、向こうに声が届かないので、そう伝えては頂けませんか?」
そうなのか…?天界規定であればアクアはこういうの把握しているんじゃないのか?
俺はエリスの助言通りにアクアに伝えた。
『はあー?誰よそんなバカな事言ってる女神は!』
「エリスって女神だが……」
『エリス!?この世界でちょっと国教として崇拝されてるからって、調子こいてお金の位にまでなった、上げ底エリス!?ちょっとナガト、あんた何かスティールみたいな術持っ

てるでしょ？エリスがそれ以上ゴタゴタ言うのなら、それであいつの胸パッド取り上げてやり』

「わ、分かりました！特例で！特例でやりますから！あと、長門さんはそんなことしません!!」

アクアの喚き声を遮ると、エリスは顔を赤らめて指をパチンと鳴らした。

それを合図に、俺の前に白い門が現れる。

因みに、俺はスティールのような物を取り上げる術は持ってはいない。

「さあ、これで現世と繋がりました……全く、こんな事は普通はないんですよ？本来なら、魔法で生き返るのは王様だろうがどんな人だろうが一回までですから」

「い、色々とすまなかったな。アクアからは俺が何とか言っておくよ」

「……あの、長門さん」

エリスは真剣な表情……ではなく、僅かに顔を赤らめながら俺に話しかける。

「長門さんは、えっと、その……む、胸パッドを取り上げたりするような如何わしいこと、しませんよね？」

「……良く分からないが、少なくとも俺にとって無意味なことはしないつもりだ」

「……良かった」

今まで、ずっと哀しげな目をしていたその女神は、やがて悪戯っ子のように片目を瞑

り、少しだけ嬉しそうに囁いた。
「この事は、内緒ですよ？」
「あ、ああ……」
俺はエリスの言葉に疑問を浮かべながら、門を押し開けた……。
「……あ～あ、疲れた。でも、長門さんが思っていた以上に優しい人で良かった……」

☆

意識が戻っていく……。

俺は頭の上に気配を感じ、そちらに視線をやる。
「…あ、やっと起きた？ったくあの子は、相変わらず頭固いんだから……。あ、冬将軍はあの人に仕留めてもらったから、もういないわ」
「ん、そうか。俺達の手助けをしてくれて感謝す……っ!?」
俺達を救ってくれた命の恩人に礼をしようと当人の方を向くと、俺は目を見開いた。
「ふふ……良い仲間を持ったわね、長門」
「小南……なのか？」
「ナガト、誰ですかその人。妙にナガトのことを知り尽くしてるみたいな発言に聞こえるんですけど」
めぐみんが口を尖らせながら俺に問いかける。
……何故怒っているんだ？
「かつての親友の小南だ。まさか、お前もこの世界に来ていたなんて……！」
命の恩人というのは、生前の親友である小南だったのだ。
親友の再会に、俺は喜びを隠しきれなかった。
「にしても、やはり知り合いだったのか。何故長門殿の名前知ってるんだろうと思っていたんだが……長門殿のこんな表情、初めてかもしれないな」
「……おいめぐみん、何でそんな機嫌悪いんだよ」

「べっつにー？まあ、ナガトの知り合いならそれで良いんですが」
「ははーん。お前、ナガトに異性の知り合いがいることに嫉妬してるんだなぁ？まあ、そういうお年頃だもんなー」
「……おい、その言葉もう一度言ってみろ」
後ろでカズマとめぐみんが喧嘩しているが……。まあ自然に治まるだろう。
とにかく、この世界の冬は、食料に乏しい過酷な環境の中、それでも生き抜こうとするモンスター達にのみ、活動が許される季節。
以前よりもクエストは簡単にはこなせないという事だ。
取り敢えず、今日はこのまま街に帰って、ゆっくりと話でもするか……。
「……あっ」
「どうした小南？」
「クリス置いてきてしまったわ……」

「さ、寒いいいい……ったく、何で分身なんて使って逃げるかなぁ……！何処行ったのーーーー!?コーーーーナーーーーンーーーー!!!」

第13話　魔道具店の訪問

俺は小南と共に、ある所でくつろいでいた。
パーティメンバーには「少し用事を済ませてくる」と適当に伝えてしまったが…あいつらのことだ、特に何も起こらないだろう。多分。
「まさかお二人がご友人だったなんて…」
ある所というのは小さな、マジックアイテムを扱う魔道具店。
そこでくつろぐ俺達に茶を出したのは店主、リッチーのウィズ。
客に茶を出す魔道具店なんてどこにあるんだと突っ込みたいところだが、道具目当てでなく、ただウィズと3人で会話するために来た俺達も人の事言えないので黙っておく。
「まあな、流石の俺も驚きを隠せなかったよ。それより、小南はウィズと知り合いなのか？」
「ダンジョンに行きたがるクリスの目を盗んで良くここに来てる。正直、ギルドに来てからほとんどダンジョン攻略だから飽き飽きしてるの…」
まあ、彼女は盗賊だからな。ダンジョンに埋まってる宝物を余計に求めているんだろ

う。互いの気持ちも分からなくもない。
「ーー俺達も俺達でパーティのバランスが悪すぎるからな、悪い部分に偏り過ぎている」
特に問題としては、安定した火力。
一発の火力であるなら、めぐみんで十分だ。
めぐみんの最大瞬間火力においては他のウィザードの追随を許さないが、とにもかくにも一発のみだ。
カズマも初めて会った時よりかは剣の使い方が様になってきたが、スキル不足や最弱職の冒険者であることを考えると、目標に到達するには少しばかり時間がかかるのかもしれない。
となると、俺が皆をサポートしていかなければならない。
…自来也先生のように稽古をつけるのもありだろうか？
「(こんな真面目で強そうなお二人でも、不満の一つはあるんですねぇ…)」
その時、ドアについている小さな鐘が、カランカランと涼しげな音を立てた。
「いらっしゃ……ああっ!?」
入店の挨拶を告げようとするが、何か危険を感じたかのような突拍子もない声を出していた。
「ああああっ!?出たわねこのクソアンデット!あんた、こんなところで店なんて出してた

の!?女神であるこの私が馬小屋で寝泊まりしてるってのに、あんたはお店の経営者ってわけ!?リッチーのくせに生意気よ!こんな店、神の名の下に燃やしていだいっ!?」

店に入るなり、いきなり俺の注意を忘れて暴れだした自称女神と、その頭を、タガーの柄で軽く殴る少年の姿があった。

どうにも見覚えがある、というより見覚えしかなかった。

「ようウィズ、久しぶり。約束通り来たぞ…ってあれ、長門こんな所にいたのか。それに小南さんも」

「ああ、少しここでくつろいでいた。それより、カズマはどうしてここに?」

「前にウィズとリッチーのスキルを教えてくれるって約束してて、スキルポイントに余裕が出来たからさ。せっかくだから教えてもらおうかなって」

「はあああああ!?!?」

カズマの言葉に何故かアクアが怒りを露わにしていた。

「ちょっと、何考えてんのよカズマっ!リッチーのスキル?リッチーのスキルですって!?以前この女に名刺貰ってた時、一体何を話してるんだろうって思ったら!リッチーの持つスキルなんてろくでもない物ばっかりよ!そんな物覚えるなんてとんでもないわ!いい?リッチーってのはね、薄暗くてジメジメしたところが大好きな、いってみればなめくじの親戚みたいな連中なの」

「うぅ…小南さ～ん！この人酷いです～!!」
「はぁ…」
　アクアのあんまりな決めつけにウィズが涙ぐみ、それを小南が呆れ気味に頭を撫でて慰めている。
「いや、なめくじの親戚でも従兄弟でもいいんだけどさ。リッチーのスキルなんて普通は覚えられないだろ？そんなスキルを覚えられたら結構な戦力になるんじゃないかと思ってな？お前だって、長門がいなかったらどうにもならない事ぐらいは分かるだろ？」
「むぅ…。女神としては、私の従者がリッチーのスキルなんて覚えることを見過ごす訳にはいかない所なんですけど…」
　俺の言葉に、アクアがぶつぶつ言いながらも渋々と引き下がる。
　そのアクアの呟きを聞き、ウィズが不安そうな顔で恐る恐る尋ねてきた。
「『女神としては』…？その、以前私を簡単にターンアンデットで消し去りかけたりしたのは…。ひょっとして、本物の女神様だったりするんですか？」
　…ヤバイな。
　流石にリッチーにもなれば、アクアが本物の女神だと分かるのか。

俺の方は未だに、アクアが女神だって事に疑問を持っているのだが。
「まあね。あなたはよそに言い触らしたりはしないでしょうから言っておくけど。私はアクア。そう、アクシズ教団で崇められている女神、アクアよ。控えなさいリッチー！」
「ヒイッ!?」
ウィズがこれ以上に無いぐらい怯えた顔で小南が座っている椅子にしがみついた。
リッチーにとって、やはり神って存在は天敵に出くわしたようなものなのだろうか。
「…ねえ長門。その子って本当に女神なの？」
「俺も疑っているのだが、彼女の怯えようからしてそうかもしれない…多分」
「まあでもウィズ、そんな怯えなくてもいいぞ。アンデットと女神なんて水と油みたいな関係なんだろうけどもさ」
そうカズマが宥めるが、当人は
「い、いえその…。アクシズ教団の人は頭のおかしい人が多く、関わり合いにならない方がいいというのが世間の常識なので、アクシズ教団の元締めの女神様と聞いて…」
「何ですってぇっ!?」
「ごごごご、ごめんなさいっ！」
「「（話が進まない…）」」
猛るアクアを引き剥がし、小南に相手してもらえと追い払うと、アクアは素直に対面

になるように座り、小南の紙手裏剣を使った手品を興味津々に見ていた。
「そう言えば、私、最近知ったのですが。カズマさん達があのベルディアさんを倒されたそうで。あの方は幹部の中でも剣の腕に関しては相当なものだったはずなのですが、スゴイですねえ」
「いや、あれはほとんど長門が……ってあれ？あのベルディアさんって、なんかベルディアを知ってたみたいな口ぶりだな。あれか？同じアンデット仲間だから繋がりでもあったのか？」
俺のそんな疑問に、ウィズが世間話でもする様な気軽さで。
「ああ、言ってませんでしたっけ。私、魔王軍の幹部の一人ですから」
にこにこしながら、そんな事を。
……。
「確保ーっ!!」
小南の手品を見ていたアクアが、ウィズに向かって襲いかかった！
「待ってーっ！アクア様、お願いします、話を聞いてください！」
取り押さえられたウィズが、アクアにのしかかられたまま悲鳴を上げる。
アクアが、いい仕事をしたとばかりに頬の汗を拭い、
「やったわねカズマ、ナガト！これで借金なんてチャラよチャラ！それどころかお釣り

がくるわ！宿を借りるどころか家だって買えちゃうわよ！」
嬉々とした表情でそんな事を言ってきた。
「…小南は知っていたのか？」
「勿論、聞いていたわ。でも、彼女はただ魔王城を守る結界の維持のために頼まれただけらしいの。ねえ、ウィズ？」
「そ、そうなんです！だから、勿論今まで人に危害を加えたことはないですし、幹部って言っても、なんちゃって幹部ですから！そもそも賞金も掛かっていませんからぁ!!」
小南とウィズの言葉に、カズマとアクアは顔を見合わせていた。
「…良く分かんないけど、念のために退治しておくわね」
「待ってくださいアクア様ーっ!!」
アクアに取り押さえられながら喚くウィズ。
俺は魔法の詠唱を始めたアクアに、まあ待てと手を突き出し。
「えっと、何だ？つまりゲームとかによくある、幹部を全部倒すと魔王の城への道が開けるとか。そんな感じか？で、ウィズは、その結界とやらの維持だけ請け負ってると」
「げーむとやらは知りませんが、そういう事です！魔王さんに頼まれたんです、人里でお店を経営しながらのんびり暮らすのは止めないから、幹部として結界の維持だけ頼めないかって！魔王の幹部が人里でお店やってるなんて思わないだろうから、人間に倒され

ないだけでも十分助かるって！」
「つまり、あんたが生きてるだけで人類は魔王城に攻め込めないし、私達には十分迷惑って事ね。カズマ、ナガト、コナン、退治しときましょう」
　アクアの言葉にウィズが泣き出す。
「待って！待ってください、アクア様の力なら幹部の二、三人ぐらいで維持する結界なら破れるはずです！魔王の幹部は元々八人。私を倒したところで、後六人も幹部がいたなら流石のアクア様でも結界破りはできません、魔王城に攻め込むには、私を浄化したとしても、どのみちまだまだ幹部を倒さないといけませんし！せめて、アクア様が結界を破れる程度に幹部が減るまで、生かしておいてください…！私にはまだやるべき事があるんです…」
　取り押さえられたまま泣き出すウィズに、流石のアクアも微妙な表情を浮かべ、チラチラとカズマを伺う。
「…俺に決めろってのか。ええっと、まあ、俺は良いと思うんだが、長門は？」
「俺も同意見だ。どのみち、今ウィズを浄化したって、その結界とやらがどうにかなる訳でもないんだろう？それに、本来なら幹部全員を倒さないと結界とやらは解けないはずが、アクアがいれば、幹部を全員倒さなくても結界が破れるなら、ウィズ以外の幹部が誰かに倒されるまで、気長に待った方がいい。どうにも危害を加えるような奴には見え

ないからな」
「でも、良いの？その幹部は一応ウィズの知り合いなんでしょう？特に恨みとかは無いの？」
　小南の疑問にウィズがちょっとだけ悩み、
「…ベルディアさんとは、特に仲が良かったとか、そんな事も無かったですからね…。私が歩いていると、よく足元に自分の首を転がしてきて、スカートの中を覗こうとする人でした。幹部の中で私と仲の良かった方は一人しかいませんし、その方は…、まあ簡単に死ぬような方でも無いですから。…それに」
　そう言った後、ウィズは。
「私は今でも、心だけは人間のつもりですしね」
　と、ちょっとだけ寂しげに笑った。
「（この子……）」
　対して小南は、そんなウィズの姿に何か思いついたかのように優しく微笑んでいた。